糸島市立

伊都国歴史博物館

紀　要

第17号

臨機応変な石錘づくり
　－海徳寺遺跡出土資料の整理から－ …… 平尾　和久（1）

三雲ヤリミゾ附近採集の鳥形容器をめぐって …… 岡部　裕俊（9）

坂元古墳群1号墳出土の金属器 …… 井上　志峰（17）

高上山古墳に関する新資料
　－『江藤正澄備忘録』から探る高上山古墳－ …… 岡部　裕俊（21）
中牟田寛也

「怡土城」築城における人間模様 …… 瓜生　秀文（27）
　－藤原仲麻呂と吉備真備・佐伯今毛人－

2022

序

新型コロナウィルスの猛威は本年度も衰えることを知らず、大波小波となって世界各地に押し寄せ、私たちの日々の行動にも大きな制限が加えられるなど少なからず影響を与え続けた一年となりました。

博物館におきましても、予定しておりました取り組みの一部で内容の変更等を余儀なくされるなど苦しい運営が続きました。来年度こそは自由で屈託ない日々が再び訪れることを願ってやまない今日この頃です。

さて、日頃の調査研究活動にも厳しい日は続いてはおりますが、本年度も５本の論考を収めることができました。いずれも市内にゆかりの文化財や歴史上の人物を題材として郷土の歴史文化をテーマに報告や考察を加えたもので、内容は、海徳寺遺跡発掘調査の成果、坂元１号墳に関する収蔵資料調査、三雲ヤリミゾ地区周辺で採集された鳥形容器の調査、高上山古墳に関する古記録検証と考察、怡土城築城に関わった人物評伝などで構成されています。いずれも短文ではありますが、各担当者が視点に工夫を凝らして執筆するなど、蒐集的な研究成果として実りある論考にまとめられています。本書が、今後の郷土の歴史文化研究の向上、解明の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、本書に掲載しました論考の執筆にあたり、ご協力を賜りました各位に厚く御礼申し上げます。

令和４年３月31日

糸島市立伊都国歴史博物館
館長　岡　部　裕　俊

臨機応変な石錘づくり
－海徳寺遺跡出土資料の整理から－

平尾　和久（糸島市教育委員会文化課）

1．はじめに

北部九州における弥生時代の石錘研究は下條信行らの研究をはじめとし、用途論（山中2007、内田2016、大庭2021）や編年論（林田・中尾2014）、地域間交流論（久田2020、柴田2021）など様々な広がりを見せつつ今日まで総統的に行われている。しかし、それらの対象はいわゆる九州型石錘とされる玄界灘沿岸地域でみられる独特な石錘であることが多い。また、林田好子・中尾篤志氏による編年研究においても、九州型石錘出現以前の状況は明瞭ではない（林田・中尾2014）。一方、縄文時代から用いられる打欠石錘は宮地聡一郎氏らによる集成的研究がなされているが（宮地2009）、縄文時代と九州型石錘が出現する弥生時代前期後半までの間の様子が不明瞭な状態は続いている。

そのような状況の中、筆者らは海徳寺遺跡の調査を行い、多くの打欠石錘を実測する機会を得た。ひとつひとつの遺物を実測する中で、これまで単純な形態であることから等閑視されていた打欠石錘の製作工程について、いくつかのパターンがあることに気が付いた。本稿では製作工程の復元等を通じて、当遺跡を拠点とした漁撈具の石錘に対する意識の一端について検討したい。

2．研究略史と研究の課題

（1）研究略史

1984年に下條信行氏が北部九州の石錘研究の基本となる論文を発表した。その中で九州型石錘を定義づけ、大型のA類とされる上窄下寳形の石錘を三分し、AⅠ類を博多湾型、AⅡ類を糸島型と命名した。また、本論では「1はじめに」の中で弥生時代の漁撈具変遷を概観している。それによると弥生時代前期に重量5～15gの管状土錘が出現し、中期になると管状土錘が姿を消すとともに、100～300gの打欠石錘が増加し、網漁に一大画期を迎えると指摘するが（下條1984）、これは御床松原遺跡の調査成果から導き出された所見である。

2005年には小畑弘己氏がロシアのザイサノフカ7遺跡から出土した打欠石錘開連遺物の分析から両極打撃による製作技法を復元し（KOUMOTO &OBATA2005）、翌2006年には久保田正寿氏が製作実験等をつうじて、小畑氏と同様に両極打撃による製作過程を復元している。久保田氏は「素材石材を台石に立て、ハンマーの側と台石の側で成形を同時進行させる方法」を両極敲打技法と定義した。また、素材の厚い部分を台石にあて、薄い側の端部をハンマーで敲打し、ハンマー側で剥離が始まる段階で天地を入れ替えて反対側を敲くと、左右のバランスが取れた縄掛け部ができることを指摘し、完成度の高い手法であるとするが、出土品にはここまでの斉一性が認められないことから縄文時代には両極打撃技法を用いたとした（久保田2006）。なお、実験の結果として、いずれの技法を用いても8割以上の完成品を得ている。しかし、久保田氏が事例としてあげた出土品は数十～200g未満のものであることには注意しておく必要があり、海徳寺遺跡のように数百gの石材においても有効なものかは検討を要する。

2009年には藤木聡氏が打欠石錘用途論の前提として、製作技法と出土位置に着目し、打欠石錘の生産の場として、河原のような素材礫が集富で、移動労力が少ない地点を想定した。また、打欠石錘製作に伴う剥片の確認が発掘調査の課題であり、剥片の有無が打欠石錘の製作や搬入の解明につながることから、調査現場における注意喚起を行った（藤木2009）。

同じ資料集で宮地聡一郎氏は福岡県における縄文時代の漁撈具を集成し、後期中葉段階から打欠石錘が集中して出土する遺跡が見られると指摘した（宮地2009）。

2011年には山本直人氏が縄文時代の打欠石錘を打欠の箇所に応じて3つに分類し、石川県の考

第１図　海徳寺遺跡の所在地

古資料や民俗資料を用いて、漁網錘と編物石の重量を検討した。その結果、８～110ｇのものは漁網錘になり、110ｇ～880ｇのものが編物石になる可能性があるとした（山本2011）。

2014年には先述した林田好子・中尾篤志氏による地域別・形態別の九州型石錘の編年案が提示され、形態の変遷が明瞭に示された（林田・中尾2014）。

また、石錘そのものの検討ではないが、下條信行氏は縄文時代に打欠石錘や切目石錘を用いていたものが、弥生時代になると朝鮮半島南岸の影響を受けて管状の土錘となり、日本型の土錘を生み出したことを指摘する（下條1993）。

（2）研究の課題

以上、打欠石錘を中心とした研究史を概観したが、以下の３つの課題が見いだされる。

①北部九州における弥生時代の石錘研究が九州型石錘を中心に行われており、九州型石錘出現以前の状況が不明瞭である。また、縄文時代後・晩期に打欠石錘が集中して出土する遺跡が確認されるが、弥生時代開始期の状況が不明瞭である。

②用途について、漁網具と編物用錘具で意見が分かれ見解の一致がなされておらず、漁具の概説的論文では打欠石錘について言及されないこともある。

③打欠石錘製作時に生じる剥片等の確認がほとんどなく、製作地等が不明である。

もちろんこれらが一挙に解決できる見込みはないが、本稿では海徳寺遺跡から出土した打欠石錘を用いて、製作工程や製作地の課題の解消に向けて考察を行う。

３．遺跡の概要と資料の分析

（1）遺跡の概要

海徳寺遺跡は福岡県糸島市志摩岐志に所在する遺跡で（第１図）、南西に位置する引津湾から約150m離れた場所に立地することから、臨海の遺跡と位置付けられる。令和２年度に道路の新設に伴い発掘調査を実施し、翌３年度に資料の整理を行い、報告書を刊行した（半尾・秋山編2022）。調査はⅠ～Ⅴ区に分けて実施した。Ⅰ区は約190㎡の調査区であるが、引津湾へ向かって落ち込む谷の肩部に該当し、遺物包含層が確認された。包含層には西側の丘陵部から廃棄された大量の縄文時代後期～弥生時代中期の土器とともに、石器やクジラ・シカ・イノシシ等の動物遺存体も出土した。この中に打欠石錘が77点含まれるが、丘陵に接する幅15mほどの調査であるため、本来はより多くの石錘が存在したものと思われる。遺構検出面の標高は6.2mほどである。

なお、九州型石錘は小型のものが弥生時代前期末より確認されるが（下條1984）、本遺跡の主体が弥生時代前期であるため、打欠石錘が主体となっている。ちなみに弥生時代中期後半の層からは、糸島型とされる大型AⅡ類の未成品が出土している。

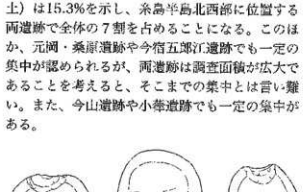
（2）打欠石錘の出土量について

福岡県における縄文時代の漁撈具を集成した宮地聡一郎氏によると、打欠石錘は貫川遺跡（北九州市小倉南区）、上南原了清遺跡（上毛町）、中村石丸遺跡（豊前市）など豊前地域と北古賀遺跡（飯塚市）、クリナラ遺跡（朝倉市）、柳瀬遺跡（うきは市）など内陸の河川沿いからそれぞれ80～200点程度出土しているが、クリナラ遺跡出土品のうち小型のものは編具の錨の子の可能性も指摘されている（宮地2009）。縄文時代の糸島地域ではそこまでの集中は見られず、広田遺跡で12

点、大原D遺跡（福岡市西区）で22点出土している。

北部九州の弥生時代漁撈具出土遺跡の集成を行った山中英彦氏が作成した表によると（山中2007）、福岡市東区に位置する三苫遺跡群5次調査や三苫永浦遺跡から100点程度の打欠石錘が出土している。一方、西側の小瀬遺跡からは14点、御床松原遺跡（井上編1983）からは51点出土したとされており、一見、博多湾の東に集中する印象を受ける。しかし、御床松原遺跡の報告書の漁撈具関係のまとめをみると、「打欠石錘は275点と大量に出土した。内訳は弥生時代48点、古墳時代36点でその他191点は包含層より出土した。（中略）弥生時代中期～中期後半に最大の出土量を示し、古墳時代前期にも多い。」と記されており（井上1983）[1]、打欠石錘の分布は、博多湾の東端と糸島半島北西部に集中することがわかる。今回分析を行う海徳寺遺跡は御床松原遺跡や新町支石墓群から西へ500mほど離れた地点に位置していることから、御床松原遺跡と同様に糸島半島北西部に含まれ、北部九州における弥生時代打欠石錘の集中域に含まれる。

次に糸島地域における分布傾向を確認すると、全体では打欠石錘が502点報告されている[2]。割合で示すと、御床松原遺跡（275点出土）は全体の半数を超える54.7％、海徳寺遺跡（77点出土）は15.3％を示し、糸島半島北西部に位置する両遺跡で全体の7割を占めることになる。このほか、元岡・桑原遺跡や今宿五郎江遺跡でも一定の集中が認められるが、両遺跡は調査面積が広大であることを考えると、そこまでの集中とは言い難い。また、今山遺跡や小葉遺跡でも一定の集中がある。



第2図　打欠石錘分類図（1／3）

（3）打欠石錘の分類・加工

海徳寺遺跡から出土した打欠石錘は、その大半が花崗岩の円礫を用い、わずかに砂岩や頁レイ岩、玄武岩も用いる。頁レイ岩は志摩峠志付近に産出地があり、地元の石材を用いたものといえる。素材として用いる花崗岩の大半は表面が平滑な円礫であることから、海岸等で採集されたものと思われる。長さ10cm、幅7・8cm程度の楕円形を呈し、下面が安定的に座るものが大半である。しかし、なかには表面の風化が著しい花崗岩の使用も認められる。

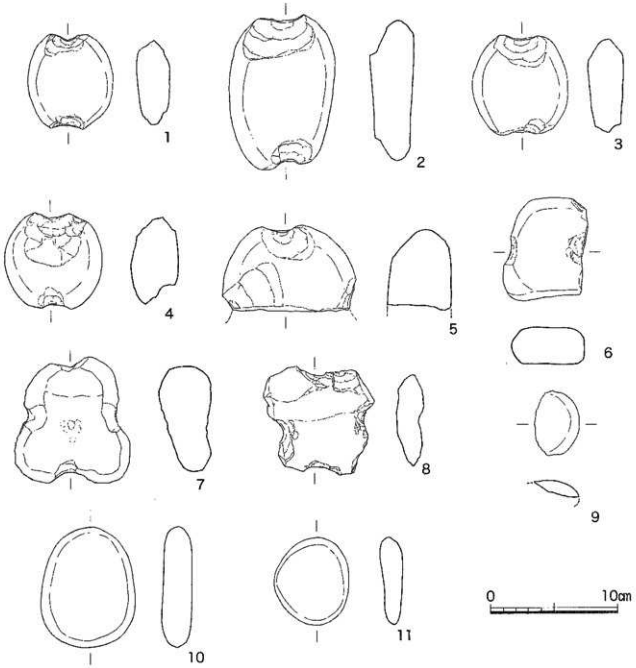
打欠石錘は先行研究でも明らかにされているように（第2図）、

Ⅰ類　石材の長軸を打ち欠くもの
Ⅱ類　石材の短軸を打ち欠くもの
Ⅲ類　石材の四側面を打ち欠くもの

の大きく3類類に分類される。海徳寺遺跡では破損品もあるため、正確な比率は不明であるが、Ⅰ類→Ⅲ類→Ⅱ類の順に数が減少する。数量的にはⅡ類はほとんどなく、Ⅰ類が主体となる。

また、打欠石錘では打欠部の先端には、使用痕ともいえる縄スレ痕が認められるが、これには大きく2種類ある。ひとつは縄スレ痕が小さく打欠部の断面が鋭いものである（第3図1、写真1）。もうひとつは縄スレ痕が大きく、断面が丸みを帯びるものである（第3図2、写真2）。後者は①使用期間が長い、②縄と石錘が擦れる度合いが強い等の理由が考えられるが、前者は石錘としての使用期間が短さが原因のひとつである。なお、海徳寺遺跡では使用痕が全くないものは認められず、少なくとも短期間は用いた上で廃棄された状況がうかがえる。なお、縄スレの範囲は基本的に打ち欠きの範囲に収まるが、第3図3のように縄スレの範囲が打欠部の外に広がるものもある。これは縄と石錘が上手く固定できておらず縄が繰り返し動いた結果、縄スレの範囲が広がったものと判断される。

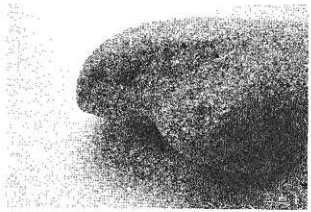
また、第3図4は平面円形の打欠石錘Ⅰ類である。打欠石錘は上下左右均等に打ち欠くものが多い中、本例の表面は上辺の打ち欠きが大きく、下辺は小さい。一方、裏面は上辺が小さく、下辺を大きく打ち欠く。おそらく片方に大きく打ち欠く部分が偏ると強度不足等が生じることからバランスを取った加工を施したと推察される。

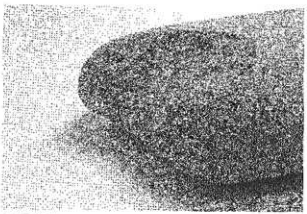


第３図　海徳寺遺跡出土打欠石錘（1／3）

海徳寺遺跡から出土した打欠石錘のうち、12点は破損品で、半分に割れたものが多い。第３図５（写真３）は打欠石錘Ⅲ類で、半分に割れている。一見、割れ口に接する部分の打ち欠きの際に破損したもののようにも見えるが、打欠部には強い縄スレ痕が残っており、使用後の破損であることが明瞭である。

それに対し、第３図６（写真４）は破損した打欠石錘を再加工したものとして注目される。本例は右側面が割れており、上側面の打欠部の存在から、本来は２倍程度の大きさで、Ⅲ類もしくはⅡ類と思われるが、破損面である右側面に打ち欠き





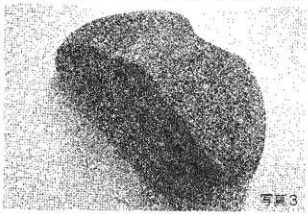


写真3

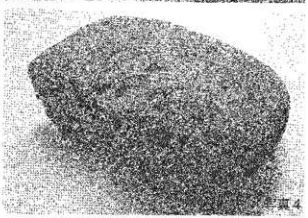


写真4

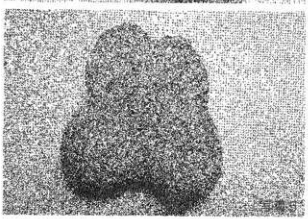


写真5

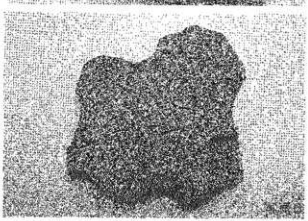


写真6

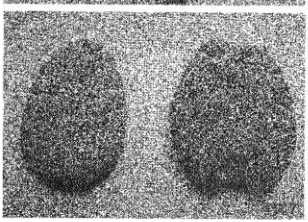


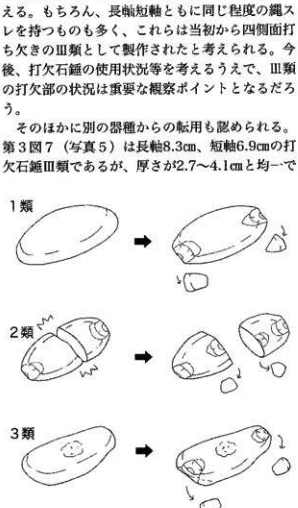
写真7

写真8

を施し、短軸を打ち欠くことで打欠石錘Ⅱ類として再生し、縄スレ痕も明瞭に残ることから一定期間使用されたことが分かる。

なお、図示していないが、打欠石錘Ⅲ類の打欠部をみると、長軸側の打欠部の縄スレ痕が大きく、短軸側の打欠部の縄スレが小さいものがある。これらは網縄の掛け方の問題もあるが、当初、Ⅰ類として用いたものを、あとから短軸に打欠を施すことで、見かけ上Ⅲ類となるものがあると考えられる。この場合も打欠石錘の再利用といえる。もちろん、長軸短軸ともに同じ程度の縄スレを持つものも多く、これらは当初から四側面打ち欠きのⅢ類として製作されたと考えられる。今後、打欠石錘の使用状況等を考えるうえで、Ⅲ類の打欠部の状況は重要な観察ポイントとなるだろう。

そのほかに別の器種からの転用も認められる。第３図７（写真５）は長軸8.3cm、短軸6.9cmの打欠石錘Ⅲ類であるが、厚さが2.7～4.1cmと均一ではなく、表・裏面に敲打痕が明瞭に残り、中央部が窪むことから、本来は凹石として用いたものを必要に応じて打欠石錘として転用したことが分かる。ちなみに、海徳寺遺跡から出土した石庖丁は５点と少なく、叩石や凹石は約30点と比較的多く出土している。



第４図　打欠石錘製作工程模式図

第３図８（写真６）は玄武岩製の打欠石錘である。本例は表面に自然面を有し、裏面が剥離面であることから、本来、石斧など別のものを作成する際に生じた大型の剥片を打ち欠いて作った石錘であると判断される。

また、石錘製作の場を示す資料として、第３図９（写真８右上）がある。丸みのある花崗岩の自然面を残す幅５cm程度の剥片で、下の石錘とは接合しないが、おそらく花崗岩円礫を打ち欠く際に発生する剥片であると思われる。このほか、第３図10・11は石錘の素材と思われる花崗岩の円礫である（写真７右）。写真７の左の打欠石錘と比較して、石材の大きさや質感に違和感がなく、石錘の素材としてよいだろう。もちろん、包含層から出土しているため、直接製作の場を示すわけではないが、近くに存在することが想定される。なお、本稿では図示していないが、海徳寺遺跡からは敲打具も比較的多く出土している（平尾・秋田編2022）。

４．小結～海徳寺遺跡における打欠石錘製作のようす～

これまで海徳寺遺跡から出土した打欠石錘を紹介してきたが、これらから以下の

製作工程１類；花崗岩円礫の採集→側面打欠→使用→廃棄

製作工程２類；花崗岩円礫の採集→側面打欠→使用→破損→再加工→使用→廃棄

製作工程３類；他器種からの転用→側面打欠→使用→廃棄

製作工程４類；玄武岩等の剥片→側面打欠→使用→廃棄

という４種類の製作工程が復元される（第４図）。量的には製作工程１類で作られるものが大半であるが、２～４類の存在から海徳寺遺跡の人々は、必要性や緊急性、適切な素材の有無などに応じて、臨機応変に石錘を作っていたようすが復元できる。

なお、今日に至るまで、打欠石錘に関する研究

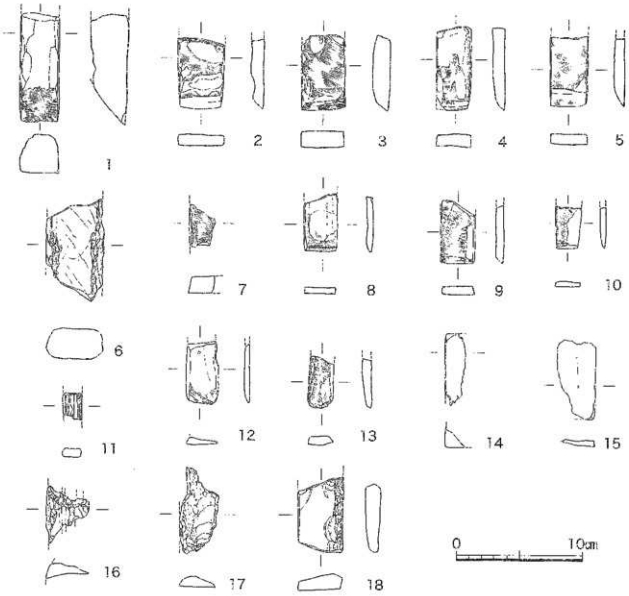
は用途論や機能論が主流を占め、製作工程や製作地に関する議論は低調である。しかし、ロシアのザイサノフカ7遺跡では剥片や失敗品、未成品の抽出が行われ、打欠石錘の製作過程が再現されているように（KOUMOTO＆OBATA2005）、個々の遺跡の検討の積み重ねから、議論を進めていく必要があるだろう3)。

5、おわりに

本稿では海徳寺遺跡における打欠石錘の製作工程を4種類に分類し、1類とした主流となる製作工程のほかに、破損品の再加工、他器種からの転用、剥片の利用など、九州型石錘とは異なる臨機応変な石錘づくりの存在を指摘した。

今後は打欠石錘が主体となる弥生時代前期から、九州型石錘が出現・展開する弥生中期・後期を迎え、変化していく石錘の組成や漁撈民の意識のあり方等を検討していく必要がある。

なお、第5図に示したように、海徳寺遺跡からは扁平片刃石斧や柱状片刃石斧の素材である層灰



第5図　海徳寺遺跡出土層灰岩製石斧と未成品、剥片（1/3）

岩の剥片も出土している（平尾・秋田編2022）。層灰岩は対馬で産出し、壱岐で石斧を製作し、製品が北部九州で流通したと考えられているが（森2013）、自然面を伴う層灰岩の剥片が出土していることから、海徳寺遺跡における石斧製作が想定され、原石の搬入に当遺跡の漁撈民が関与した可能性が考えられる[4]。今後は、すでに海村と性格づけられている御床松原遺跡とあわせて（武末2004）、糸島地域の漁撈民（海人）の通史的な役割についても検討を進めていく必要があるだろう。

1）ただし図化されたものは、その一部である。
2）このほか、糸島高校博物館には糸島地域を中心とした遺跡で採集された打欠石錘が大量に収蔵されている。なお、502点の中には広田遺跡など縄文時代の打欠石錘も含む。
3）ザイサフカ7遺跡の報告書は古澤義久氏を通じて福岡大学考古学研究室の蔵書を閲覧・複写させていただいた。また、西田尚史氏には文献収集にご協力いただいた。
4）近年、佐藤由紀男氏が原の辻遺跡の層灰岩製片刃石斧生産について、「広域流通を担った生産遺跡である概算性は低い。周辺流通もしくは自己消費を担った生産遺跡」であると指摘する。あわせて、九州本島出土品の比琉とあう資料は原の辻遺跡に存在しないことも指摘し、「原の辻遺跡で生産された製品が九州本島内に流通した可能性は否定できないものの、それが九州本島内の層灰岩製片刃石斧の主体を占めた蓋然性は低いとする」（佐藤2017）。佐藤氏の指摘を受け、福島日出海氏は層灰岩製片刃石斧の生産と流通を再検討している（福島2021）。海徳寺遺跡が所在する糸島地域と壱岐島の関係は弥生時代中期以降、密接なものとなることから、森氏の見解に魅力を感じるが、海徳寺遺跡出土層灰岩の比重は未確認であり、今後、計測を進めていく必要性がある。

【図・写真の出典】
第1図　江原編2020を改変・転載
第2～5図　平尾実測・作図
写真1～8　平尾撮影

【参考文献】

KOUMOTO Masayuki&OBATA Hiroki2005『Zaisanovka 7 Site, in Primosky, Russia-Preliminaly Result of Excavation in 2004』平成16年度～平成18年度科学研究費補助金（基盤研究A１・海外）研究成果報告書

安孫子昭二1999「石器石錘による「もじり漁」実験」『東京考古』27

井上裕弘1983「漁撈具としての土製品・石製品」『御床松原遺跡』志摩町文化財調査報告書第３集

井上裕弘編1983『御床松原遺跡』志摩町文化財調査報告書第３集

内田雄嵐2016「九州盤石錘についての実測一下脇分類A１型＝試掘形石錘の成立と展開一」『海と山と星の考古学　山崎純男博士古稀記念論集一』

江原遺物編2020『紀之浦銅山遺跡』糸島市文化財調査報告書第23集

大関孝夫2021「九州盤石錘の機能に関する一試論～鹿児島市西新町遺跡出土石錘を中心に　」『九州歴史資料館研究論集』46

久保田正寿2006「周縁部打撃法による鍛石錘の製作」『立正史学』99

佐藤由紀男2017「石材の比重からみた弥生系磨製石斧の生産・流通」『岩手大学　文化財論叢』9

柴田昌児2021「銅戸内の海に生きた弥生人」「『紀伊半島をめぐる海の道と文化交流』予稿集・論考集」

下條信行1984「弥生・古墳時代の九州盤石錘について」『九州文化史研究所紀要』29

下條信行1993「わが国初期稲作期における上層の伝来と変容」『考古論集』潮見浩先生還暦記念論文集

武末純一2004「加耶と倭の交流」『国立歴史民俗博物館研究報告』116

田井中洋介2007「石錘による網漁」『縄文時代の考古学』５なりわい―食糧生産の技術　同成社

堀実篤二2009「縄文文化的漁撈活動と弥生文化的漁撈活動」『弥生時代の考古学』　５食料の獲得と生産　同成社

長沢宏昌2003「山岡地の漁撈と打欠石錘の用途」『山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター研究紀要』19

林田好子・中尾篤志2014「九州盤石錘の集成と試論」『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要』4

久田正弘2020「北陸地方の九州型石錘と山陰系偽形土器について」『石川県埋蔵文化財情報』43

平尾和久・秋田雄也編2022『海徳寺遺跡』糸島市文化財調査報告書第27集

福島日出海2021「層灰岩製片刃石斧の生産と流通に関する研究ノート」『古文化談叢』87

藤本遵2009「打欠石錘の用途と切目石錘の来歴」『九州における縄文時代の漁撈具』第19回九州縄文研究会長崎　大会発表要旨・資料集

宮地聖一郎2009「福岡県の縄文時代漁撈具」「九州における縄文時代の漁撈具」第19回九州縄文研究会長崎大会発表要旨・資料集

森貴教2013「弥生時代北部九州における片刃石斧の生産・流通とその背景」『古文化談叢』69

山口英彦2007「「博多湾貿易」を支えた古代海人」『古文化談叢』57

山本巡人2011「縄文時代の打欠石錘の用途に関する一考察」『名古屋大学文学部研究論集』史学57

三雲ヤリミゾ附近採集の鳥形容器をめぐって

岡部　裕俊（伊都国歴史博物館）

1．はじめに

筆者が糸島地方の弥生時代を学ぶなかで、中山平次郎の一連の研究論文には大きな刺激を受けることが多かった。論文中には多くの資料の図が掲載されたが、なかでも私の脳裏から消えない一点の土器があった。それが「九州北部に於ける先史原史時代中間期間の遺物に就いて（一）」（註1・以下「大正7年報告」）の第4図に掲載された「鳥形容器」（第1図（74））である。「三雲ヤリミゾ附近」で採集されたとされ、鳥を模ったとみられる丹塗磨研の土器品の下部に脚台がつく。

この報告には、同地で採集した土器として須玖式壺棺の破片（30）とともに弥生時代中期後半の甕（49）、甕（48）、高坏（14，66）、弥生時代後期の高坏（70）などが紹介されており、当該土器もこの時期に属するものとされるが、採集地点や状況などの詳細は明らかでない。弥生時代の形象製品が少ない北部九州においては異彩を放つ土器であるが、その後の研究において俎上にあがることはほとんどない幻の土器と化していた。

さて、筆者は平成28年度に開催した当館の秋季特別展「三の鏡」展の開催にあたり、出原のお願いに九州大学考古学研究室を訪れた際、かねてから関心のあった鳥形容器について宮本一夫教授にお尋ねしたところ、ほどなくその場での実見の機会に恵まれ、あわせて当該展示会への出品についてもご快諾いただいた。奇しくもこの土器が世に知られてから100年の節目にあたり思い出深い展示となった。

展示図録（註2）のなかで資料を紹介することができたものの、紙面の制約もあって詳細まで述べることができなかった。そこで改めて本誌において観察結果とともに若干の考察も交えて報告する。

なお、資料の調査機会を与えていただきました宮本一夫先生に、感謝申し上げる次第である。

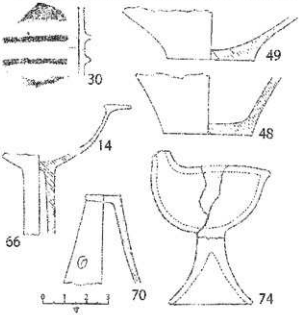
2．資料観察

当該土製品は、内面に「三雲ヤリミゾ附近」の注記があり（第2図写真①）、まさに中山が採集した地点名と一致する。中山の報告文では、「高き足を有せる鳥形容器の破片の如くにして、外面全部赤塗なり。図中の点線は器の厚さを示す。」と解説されている。その実測図から計測した鳥形の体長は16.6cm。器高は20cm弱で、当該資料の計測値は後述のように近似値を示しており、丹塗磨研土器であること、何より側面観の特徴的な形状から当該資料であることは疑いなく、その姿を鳥形と評した中山の見立て通りである。

胴部、脚部ともに主軸方向にほぼ垂直に半裁されて半分弱が残るものの、残存部位は胴部と脚部では180度異なり、接点はわずかで破断面の損傷痕跡が新しいので、おそらく掘り出された際の破損と考えられる。偶然とはいえ、所面観察や原形を推定するうえでは過不足のないぎりぎりの残存状態であったといえる。

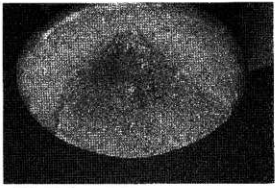
中山の図にも示されているように胴部の中央側面に逆三角形状の欠損部があり、石膏による充填復元が行われている。胴部から脚台部にかけての外形は機械図上で復元することができた（第2図）。現状値で全長18.4cm、幅12.5cm、高さ18.7cmとなる。

頸部は根元から折れているが、本来は斜め前方に

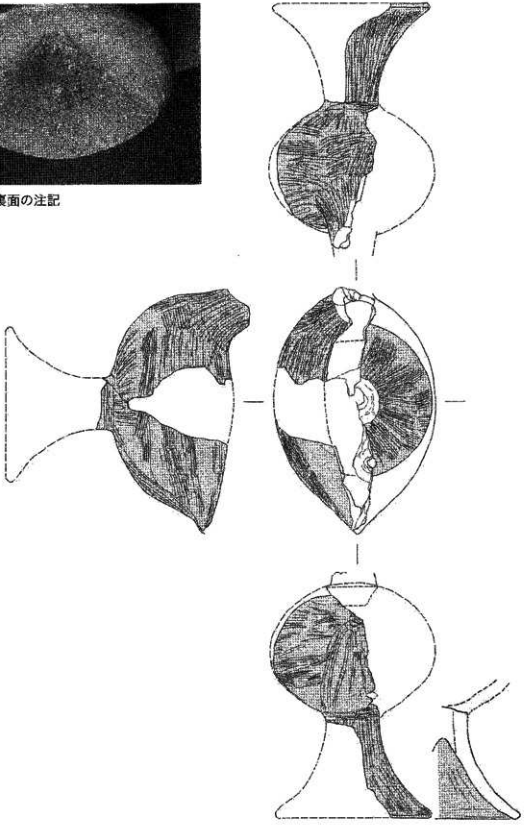


第1図　三雲ヤリミゾ附近採集土器

（註1文献図より抜粋。数字は文献原図中の土器番号）



①脚台部裏面の注記



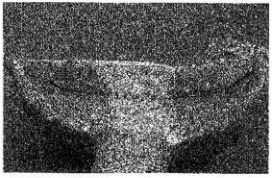
第２図　鳥形容器実測図および細部写真(実測図は1/3　写真倍率は任意)

向かって延びていたと推定され、中空で器壁の厚さは5～8㎜を測る。内面にはナデによる成形痕跡が認められるものの表面に凹凸が残るなど、さほど丁寧に行われたものではないようである。

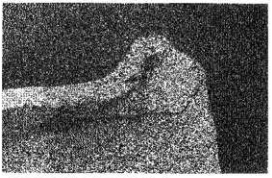
胴体は楕断面が円形に近くふっくらとした印象である。表面には羽などの付着痕跡は認められない。尻尾は短く先端に向って尖りぎみにおさめる。

胴下部と脚台部の境は丁寧に接合されている。筒状の脚柱部の中位から裾にラッパ状に広がり、裾の径は12cmほどで端部断面は丸く仕上げる。

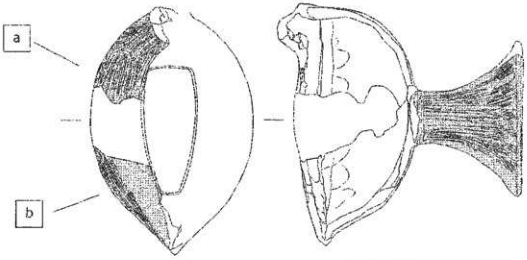
成形にあたっては、胴体は底部から側面にかけて楕円形の鉢状につくり、これに別づくりの背部を載せて接合している。外面は全面に丹塗り磨研が施されているが、内面はナデや指の押圧調整にとどまり、胴体と背部の接合に当たっては、中ほどまではヘラ状の工具を押し当てるナデ調整が行われる(第2図

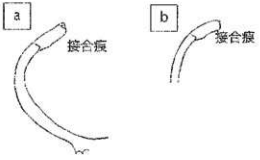


②背面の接合痕



③頸部付近の接合痕跡拡大





④尾部下の穿孔痕跡

写真②)が、奥までは及んでいない。これは、背面中央に最大幅4.5cmほどの中央が膨らみぎみの長台形の口を開け、そこから工具の届く範囲にナデ調整が施されたことによるとみられる。

なお、この長台形の口からは、上に立ち上がる口頸部が付設された痕跡は認められない。

表面は全面に丹塗りが行われており、脚台部では裏側にまで塗られているところが極めて稀である。脚部には横方向、頸部と脚台部には縦方向の丁寧な研磨が施されるなど、精度の高い丹塗磨研土器として仕上げられている。

尻部下方には外部から内部に向けて径5mmほどの焼成後穿孔（第1図③）の痕跡が確認された。当該地で多くみられる丹塗磨研土器などに施される穿孔痕と同様である。

これらの様相から、当該土器が何らかの祭祀に使用されていた可能性が極めて高いと考えられ、その具体的な用途については気にかかるところである。

当該土器の欠失している頸頸部の形状については、近隣では類似する製品は確認できないので、地域は異なるものの弥生時代の鳥型土器として知られる八日市地方遺跡（石川県・弥生中期）や朝日遺跡（愛知県）の同種資料を参考にして検討すると、三雲例は頸部が細く上方に向かってさらに窄まっていることから、通常の土器の口縁のような注ぎ口は成形されていなかったと考えられ、鳥の頭部が模られた可能性が高い。想像逞しくすれば、嘴部付近に注口を設けた酒器として使用されたものであろうか。

どのような鳥を模したかといえば、尻尾が短く少し横広に成形された様子から、鶏とは考えにくく、鴨のような水鳥がイメージしやすい。

3．考察

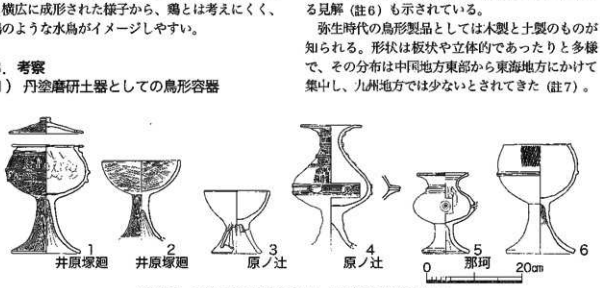
(1) 丹塗磨研土器としての鳥形容器

当該土器は表面全体に丹塗磨研が施されており、器の下部に穿孔が施されていることから、何らかの祭祀に用いられたものと推定される。北部九州では、弥生時代中期後半を中心に丹塗磨研土器が井戸、河川水源、葬送など様々な場面で行われた祭祀において用いられたことが知られる。このうち、広口壺、袋状口縁壺、高杯、短頸壺など糸島地方を中心に分布するものは、特に『糸島型祭祀用土器』と称され、糸島地方を中心とした祭祀の共有圏域を示す政治性を帯びた器物としてその重要性が指摘されている（註3）。なかでも脚台が付された広口壺、短頸壺、鉢（第3図）は、精製度も高く個体数も極めて少ない。一例をあげれば脚台付広口壺（第3図4：5）には双口を付されたものがあり、三雲・井原遺跡、元岡・桑原遺跡、吉武遺跡群、比恵・那珂遺跡、原の辻遺跡など各地の拠点的集落に限定的に出土している（註4）。特殊な形状を有する鳥形容器もこれらと同じような性格を有していた可能性を指摘できる。

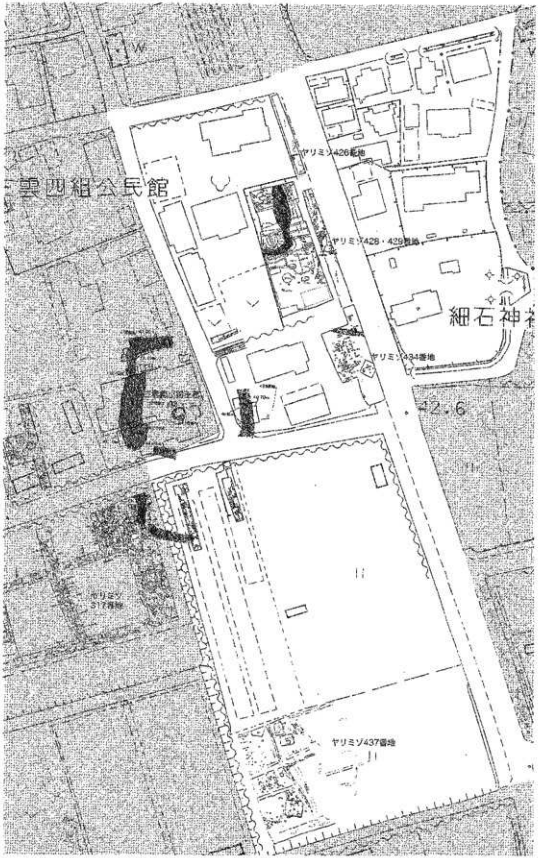
(2) 弥生時代の鳥形

そもそも、鳥形を呈する造形品は縄文時代にはほとんど見られず、弥生時代に出現し鳥類を尊ぶ思想が稲作農耕文化とともに大陸から伝来したことを契機とし、穀霊として主に農耕儀礼で用いられたと考えられてきた（註5）。しかし、鳥霊思想の根幹には「霊魂が鳥に乗り、あるいは鳥形をして他界に飛翔する」とする指摘があり、これに基づき、出生、葬送の儀礼においても鳥はその役割を果たしたとする見解（註6）も示されている。

弥生時代の鳥形製品としては木製と土製のものが知られる。形状は板状や立体的であったりと多様で、その分布は中国地方東部から東海地方にかけて集中し、九州地方では少ないとされてきた（註7）。

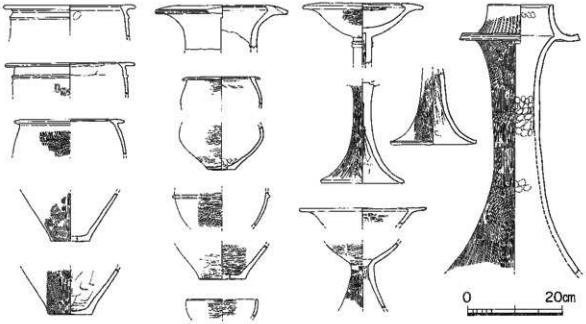


第3図　須玖式期の脚台を付した丹塗り磨研土器例

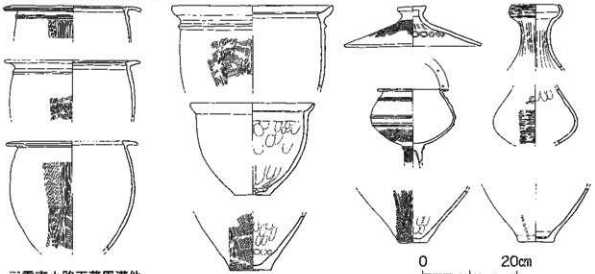


第４図　三雲・井原遺跡三雲ヤリミゾ地区（白抜き範囲）周辺の現状と主な発掘調査地点(1/1200)

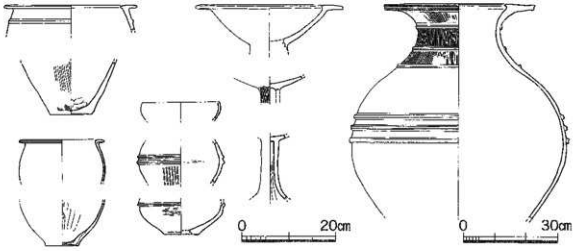
三雲ヤリミゾ428、429番地祭祀溝



三雲ヤリミゾ426番地祭祀土壙



三雲南小路王墓周溝他



第５図　三雲ヤリミゾ428、429番地祭祀土壙（上段）、426番地祭祀土壙（中段）、
三雲南小路王墓周溝他（下段）　出土土器実測図（1/8）

しかし、近年は上鑪子遺跡（桑島市）や元岡・桑原遺跡(福岡市)で木製鳥形の出土が報告され（註8）、玄海灘沿岸地域での出土事例も増加している。本来、稲作とともに大陸から伝播したとすれば当然の現象ともいえるが、素材や用途の違いが出土遺構、引いては出土数に影響してきた可能性もあり、今後とも注意を要する。

鳥形容器に特化した研究では、近年の白石晋也の論考（註9）が注目される。全国の弥生～古墳時代前期の76例を集成・分析したなかで、類型ごとの使用傾向を指摘するとともに、葬送儀礼での使用実例として亀井遺跡（大阪府）の方形溝墓出土例を上げ、その初現が弥生時代中期まで遡ることを指摘した。このことは、今回紹介している鳥型容器の用途を考える上でも重要である。

(3) 採集地から想定される鳥形容器の用途

鳥形容器の採集された「三雲ヤリミゾ附近」について、地名からまず眼に思い浮かぶのは江戸時代天明年間に発見された井原鑓溝（ヤリミゾ）遺跡や小字が共通する。実は「ヤリミゾ」は井原地区と三雲地区にまたがる小字で、時期は定かでないが、分村によって「ヤリミゾ」が両村に分かれたと考えられ三雲・井原遺跡における王墓が集中する王墓域の一角に位置する。

大正4年の地籍図によれば当時の「三雲字ヤリミゾ」の範囲は第4図の通りである。現在の細石神社を含めその西側周縁の部～南の一帯を含むおよそ東西100m、南北200mの範囲となる。

「大正7年報告」の冒頭には「怡土村三雲ヤリミゾ附近」と書かれているのみであるが、後段には、

「用爆以南三雲民居附近に亙る地域は耕地より土器破片の多数を出したるところにして、文政中鉾剣鏡及玉類を伴出したる大甕を発掘せる細石神社とも隣接し、此界隈一帯の田圃には素焼土器の飽に往々蒲瓦陶器破片及黒曜石片を散見す。（中略）　鑓溝附近より採集したる破片類は其数少なからずして（後略）」

と記されている。細石神社を起点とした「此界隈一帯の田圃」が遺物採集ポイントの一つであったことがうかがえる。

「文政中」に発見された遺構とは、三雲南小路土墓1号甕棺墓のことで、中山は、大正6年頃からたびたびこの界隈での聞き取りや遺物の採集を行っている。この聞き取り調査によって地元民からも長らく忘れ去られていた伊都国王墓の位置の特定にいたった（註10）のであるが、このことが判明したのは大正12年頃のことで、それ以前は遺跡の位置を特定できないまま調査や資料採集が続いていたことが、「大正7年報告」中に記されている。

このため、すでに中山が小字名として認知していた「ヤリミゾ」地区を中心にその周辺一帯で採集されたものを含めて紹介されたと考えられ、これを裏付けるように、「大正7年報告」には南小路地区の西部で採集した打製石斧もヤリミゾ附近出土資料として報告されている。つまり、三雲南小路王墓周辺も採集地に含まれていたことは留意しておく必要がある。

三雲・井原遺跡におけるヤリミゾ地区の位置関係について整理しておこう。伊都国の拠点集落である三雲・井原遺跡は、南北1200m、東西700mに及ぶ広大な集落遺跡であるが、ヤリミゾ地区は主要な集落空間と考えられる番上、仲田、イフ地区の南西部に位置し、西には伊都国王墓の一つである三雲南小路王墓が隣接する。三雲南小路王墓から北に延びる微高地の先端には工の居館とも目される下西環濠遺構も立地しており、この微高地と主要集落空間との間には浅い谷が南北に分断するように横たわる。現在は平坦に見える地形も弥生時代の地形凹凸を復雑である（註11）。

現在、三雲ヤリミゾ地区では、その中央を県道が通り、平成16年度にこの拡幅工事に先立ち発掘調査が行われた。また、これと前後して井原鑓溝王墓の所在地を確認するための調査も実施された。

これら一連の調査において、鳥形容器と同時期の弥生時代中期後半～後期初頭の遺構、遺物の検出が顕著であったのは以下の地点であった。

ヤリミゾ426番地

弥生中期後半の祭祀土壙が検出され、丹塗磨研土器を含む甕、壺、鉢、袋状口縁壺、脚付短頸壺などが出土した（第5図上段）。

ヤリミゾ428、429番地

成人用甕棺1基、小児用甕棺2基、北から延びる幅3～5m、深さ30～40cmの溝は、中途から西に屈曲する。埋土から丹塗磨研土器とともに大型の筒形器台（第5図中段）、完形の袋状鉄斧も出土し、祭送に関連する遺構で、方形区画墓（墳丘墓）の周溝である可能性がある（註12）。

ヤリミゾ434番地

429番地の南に隣接する調査地点で、その北東

端から弥生時代中期末の小児用甕棺墓と祭祀土壙を検出した。このさらに南で検出された東西溝には墓域の区画溝であった可能性がある。

上覚439番地

三雲南小路王墓の南側に市道を挟み隣接する水田が調査地点であった。二条の溝を検出し、両溝とも埋土から弥生中期中葉～後期の土器が出土したが、中期の土器には丹塗磨研土器の壺、甕が含まれていた。2号溝からは完形の鉄鉾も出土している。1号溝はL字の屈曲部を有することから、方形区画墓（墳丘墓）の周溝の一部である可能性を有す（註13）。

三雲南小路王墓については、既往の調査報告によって、一辺33m前後の方形の墓域（墳丘）の周囲に周溝をめぐらした弥生時代中期末の伊都国王墓であることが明らかとなっており、周溝からは弥生時代後期～古墳時代前期にかけての多量の土器が出土している。しかし、築造時のものと考えられる上器の出土量は少なく、また、小片ばかりで、これまでのところ残存状態が良好な土器の出土は極めて少ない（第5図下段）ことから、王墓の築造以後、周溝の溝さらいなどの維持作業とともに長期にわたる追善的な祭祀が行われていた可能性がある。

以上、一連の調査の成果から、ヤリミソ地区周辺一帯では弥生時代中期後半～末の丹塗磨研土器を伴う祭祀溝が確認され、これらの溝の機能について、特に429、439番地で検出したL字状に屈曲する溝は方形区画墓の周溝の一部である可能性が高く、完形の鉄製武器や工具、糸島地方では少ない精製大型器台の出土は、これら祭祀を主催した集団の社会階層の高さもうかがわせる。

一方、住居跡など当該期の生活遺構は認められず、この一帯が伊都国有力層の墓群やこれにともなう祭祀空間であった可能性が高い。

また、西に隣接する南小路地区では、弥生時代中期末の伊都国王墓である三雲南小路王墓が所在し、王墓域の一角を占めることも明らかとなった。

4　おわりに

三雲ヤリミソ附近で採集された鳥形容器について、その性格と意義を探るために、詳細な遺物観察、また、中山の採取活動の足跡をたどり採集地の絞り込みを試みるとともに、周辺での既往の調査結果を概観した。

その結果、当該土器が弥生時代中期後半～末に属し、裏面まで赤彩が施された脚台を付す特殊な丹塗磨研上器であることを指摘した。

また、採集地点とされる三雲ヤリミソ附近は、現在のヤリミソ・南小路地区を中心とする一帯にあたる可能性が高く、この地区の近年の調査成果から、一帯が弥生時代中期後半～末にかけて三雲南小王墓を頂点とする墳墓群を構成し、他にも区画墓（墳丘墓）が存在する可能性を有するエリアであることも確認できた。

当該鳥形容器が、王墓や墳丘墓に伴って出土したとすれば、まさにこれらの葬送儀礼に伴う祭祀土器であった可能性が高く、白石が指摘したように鳥形容器の用途の多様化を示す新たな資料ともなる。

土器の出土地点については、現在確認された部位は資料全体の半分程度にとどまっており、この残片が将来の発掘調査で新たに発見され、出土地が特定される可能性もある。このことから三雲・井原遺跡では、後世の攪乱であっても細心の注意を払いながら取り組む必要があることを記して結びとしたい。

本稿の執筆にあたり、菅波正人、常松幹夫氏にご教示を賜った。末尾ではあるが記して感謝の意を表したい。

【註】

1、中山平次郎1917「九州北部に於ける先史遺跡弥生時代中期頃の遺物に就いて」『考古学雑誌』7－10

2、岡崎敬後2016「伊都国王墓にまつわる祭祀」『王の墓～平原王墓とその時代～』伊都国歴史博物館

3、石橋新次1992「糸島型祭祀用土器の成立とその意義」『北部九州の古代史』有明文化を考える会

4、常松幹雄氏よりご教示

5、平林哲也2011「白基鉄仰と武器－」126頁『酒と魚の文化史』

6、註5におなじ

7、白石祐也2016「弥生時代における鳥形土器品の投棄」129-130頁『古代』早稲田大学考古学会

8、前原市教育委員会1996『上鋤元遺跡　見えてきた伊都国人　のくらし－』

糸島市教育委員会2012『元岡・桑原遺跡第42・52次調査』

9、註7文献に同じ

10、中山平次郎1923「三雲南小路における特殊短脚脚付土器」『考古学雑誌13－9』

11、角浩行2006「三雲・井原遺跡出土品の成立と変遷」『伊都　国歴史博物館紀要創刊号』

12、平尾和久2010「三雲ヤリミソ地区429-1番地（第5・6地点）」三雲・井原遺跡VI』　糸島市教育委員会

13、白石祐也2016「上覚地区439番地1,2号溝について」『三雲・井原遺跡IX』2014　糸島市教育委員会

坂元古墳群１号墳出土の金属器

井上　志峰（伊都国歴史博物館）

Ⅰ．はじめに

坂元古墳群は糸島市篠に所在し、古墳時代後期から終末期にかけての３基の古墳からなる。昭和54（1979）年に前原町教育委員会（当時）による遺跡の現地踏査の際に、土取り工事等で崩壊寸前のところを実見され、急遽発掘調査が行われた。

今回、当古墳群の資料整理を行った際、報告書に未掲載であった１号墳出土の金属器資料を確認することができたため、資料の周知を図るとともに今後の検討資料となるよう本稿で紹介する。

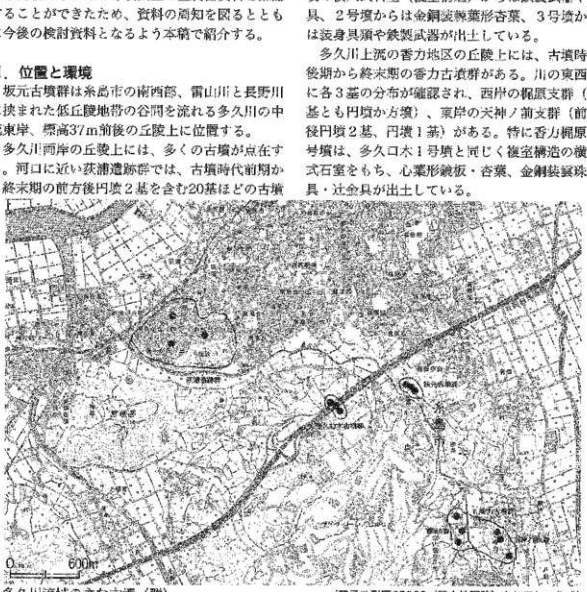
Ⅱ．位置と環境

坂元古墳群は糸島市の南西部、雷山川と長野川に挟まれた低丘陵地帯の谷間を流れる多久川の中流東岸、標高37m前後の丘陵上に位置する。

多久川両岸の丘陵上には、多くの古墳が点在する。河口に近い荻浦遺跡群では、古墳時代前期から終末期の前方後円墳２基を含む20基ほどの古墳が確認されている。砂糸塚１号墳（前方後円墳）からは金銅装大型雲珠金具、立石１号墳（前方後円墳）からは方格Ｔ字鏡、坂の下５号墳（方墳）からは鉄鏃大刀や銀装辻金具が出土している。

坂元古墳群の対岸の丘陵上には、古墳時代中期末から後期前半の多久口木古墳群がある。円墳の１・２号墳、前方後円墳の３号墳からなり、１号墳の横穴式石室（複室構造）からは鉄製武器や馬具、２号墳からは金銅装鞍形杏葉、３号墳からは装身具類や鉄製武器が出土している。

多久川上流の香力地区の丘陵上には、古墳時代後期から終末期の香力古墳群がある。川の東西岸に各３基の分布が確認され、西岸の梶原支群（３基とも円墳か方墳）、東岸の天神ノ前支群（前方後円墳２基、円墳１基）がある。特に香力梶原１号墳は、多久口木１号墳と同じく複室構造の横穴式石室をもち、心葉形鏡板・杏葉、金銅装冠帽金具・辻金具が出土している。



多久川流域の主な古墳（群）　（電子地形図25000（国土地理院）を加工して作成）

Ⅲ．坂元古墳群１号墳について

坂元古墳群１号墳は、６世紀前半に築造された墳丘径16.3m、高さ2.1mを測る円墳である。周囲に幅1.7m、深さ0.35mの周溝がめぐる。

埋葬施設は、多久口木１号墳や香力梶原１号墳と同じ複室構造の横穴式石室である。全長10.6mを測るが盗掘を受け破壊が著しく、ほぼ腰石のみが現存する。玄室は長さ3.8m、幅2.6m、前室は長さ2.2m、幅1.4m、羨道部長さ3.5mで、羨門部は石塊で閉鎖されていた。なお、羨道部土層断面の精査及び土器型式等から、６世紀後半に追葬が行われたと考えられている。

遺物は、玄室又は前室の左側壁部で須恵器（坏蓋、杯身、高坏、ハソウ等）・馬具（引手）が、墓道部左側より須恵器（坏、高坏、甕等）が出土している。紹介する金属器は玄室や前室、羨道からの出土とみられるが、正確な位置は不明である。

Ⅳ．１号墳出土の金属器について

石室や羨道から出土したとみられる金属器は、武器、馬具、装身具等がある。

（1）武器（写真１・２）

① 刀装具（写真１）

写真１は金銅装鞘金具で、責金具及び筒金具とみられる。櫛口、鞘間、鞘尻のいずれのものかは不明だが、長径の大きさから鞘尻につく金具ではないかと推察される。筒金具は、外表面に文様等の装飾は認められず、黒ずみや緑青が部分的に見られるが、鍍金部分は残りがよい。内部に鞘材の木質は確認できなかった。現存長4.8cm、長径2.8cm、短径1.2cm、厚さ0.1cmを測る。責金具は長径3.0cm、短径1.8cm、厚さ0.2cmである。

② 鉄鏃（写真２）

鉄鏃片が８点出土しており、そのうち鏃身部１点、頸部とみられるものが６点、茎部とみられるものが１点である。

１は三角形鏃の鏃身部で、現存長5.2cm、幅3.1cmを測る。２～５及び７・８は長頸鏃の頸部とみられる。２は現存長6.4cm、幅0.8cm、３は現存長3.8cm、幅0.8cm、４は現存長3.0cm、幅1.0cm、５は現存長3.2cm、幅0.6cm、７は現存長4.6cm、幅0.6cm、８は現存長6.7cm、幅0.8cm。６は茎部とみられるが、どの形式による鏃のものかは不明である。現存長3.6cm、幅0.6cm。

写真１　金銅装鞘金具

写真２　鉄鏃

（2）馬具（写真３～７）

① 轡（写真３・４）

写真３・４ともに鉄製素環鏡板付轡である。いずれも一対のものとみられる。

写真３の１は、鏡板は楕円形を呈し、板状の長方形の立聞（一部欠損）が付いている。また、引手や銜の環状部が残る。素環部長径7.2cm、短径6.2cm、立聞幅3.0cm、同高2.0cmを測る。引手の残存長は8.5cm、銜の残存長は4.8cmを測る。２は、１と同じく鏡板は楕円形を呈するとみられるが、半分ほど欠損している。１とのセット関係を踏まえると、素環鏡板は同程度の大きさとなるだろう。また、立聞は１と同じく板状の長方形を呈しており、長方形の孔が穿たれている。立聞幅3.0cm、同高2.0cmを測る。

写真４の１は、鏡板は楕円形を呈し、板状の長方形の立聞が付く。引手は環状部の手前で折れているがほぼ完形であり、銜は一部を残している。素環部長径7.5cm、短径6.5cm、立聞幅2.5cm、同高2.0cmを測る。立聞の孔は、写真３における鏡板の立聞の孔と比較しても縦幅はかなり狭く、横に細長いものとなっている。引手長17.2cm、環状部径3.2cmである。２も鏡板は楕円形を呈し、板状の長方形の立聞が付く。引手は完形であり、銜は一部を残すのみである。素環部長径7.0cm、短径5.7cm、立聞幅3.5cm、同高2.0cmを測る。引手長17.2cm、環状部径3.4cmである。

② 鉸具（写真５）

一対の鉄製鉸具である。いずれも輪金の中央がわずかにくぼむ形状であり、棒状の刺金が付く。１は全長7.8cm、最大幅4.6cmを測る。刺金は、5.2cmほど残して先端部が欠損している。２は全長7.5cm、最大幅4.3cmを測る。刺金は全長8.2cm。

③ 帯先金具（写真６・７）

どちらも鉄地金銅張爪先形帯先金具とみられる。

写真６の１は爪先の形状がよく残り、長さ3.5cm、幅2.1cmを測る。先端部に１箇所、基部の２箇所に鉄鋲が打たれ、先端部の鉄鋲は長さ1.9cm、鋲頭の径1.1cmである（写真７）。基部の２箇所は、鋲頭と先端を欠いている。先端部の鋲頭付近の鉄地には、わずかに金箔が残り、緑青もみられた。また、基部右側の鉄鋲付近の鉄地にもわずかに緑青が確認できる。写真６の２は上部先端の一部を欠くが、１と同じく爪先形帯先金具とみられる。長さ3.2cm、幅2.3cmを測り、基部には２つの鋲頭が残る。左は鋲頭のみで先端を欠いており鋲頭の径1.0cm、右は鋲頭と先端も残っており鋲頭の径1.0cm、長さ2.2cmである。左の鉄鋲の上部及び右側の鋲頭にもわずかに金箔が確認できた。

写真３　鉄製素環鏡板付轡

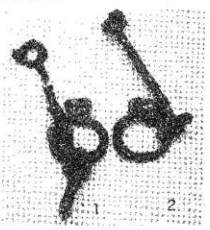


写真４　鉄製素環鏡板付轡

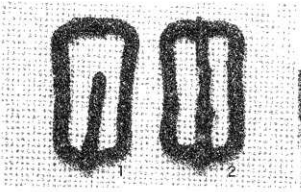


写真５　鉸具

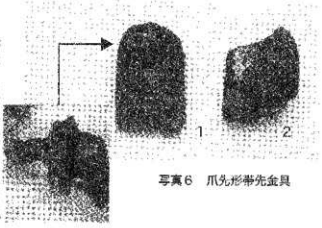


写真６　爪先形帯先金具

写真７　鉄鋲

写真8　耳環

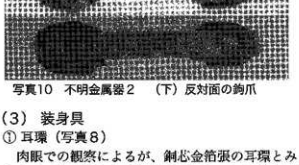


写真10　不明金属器2　（下）反対面の鉤爪

(3)　装身具

① 耳環（写真8）

肉眼での観察によるが、銅芯金箔張の耳環とみられる。両面ともに表装材が破損している箇所があり、一部では緑青がみられた。開口部には、わずかだが絞りしわと道具痕と思われるものが確認できる。また、開口部と反対側の鍍金部分には、曲げ加工に伴うしわもみられた。外径2.5cm×2.9cm、内径1.7cm×1.9cm、太さ0.5cmを測る。

(4)　その他

① 不明金属器1（写真9）

写真9は銅製の装飾金具とみられ、楕円形を呈する。中央に0.3cmほどの鍵状の穴が開けられ、その左右に0.2cmほどの鉤状の突起がある。当該金具の下には有機質のものが残り、それを鉤状突起で留めている。また、その鉤状突起の基部は長方形の金具で、その中央にある楕円形の窪みには、平仮名の「お」の「゛」を除いたような文様が施される（写真9右）。材質や有機材を伴う点から、不明金属器2（写真10）とセットとみられるが、そのつくりや加工の精巧さから、どちらも後世のものである可能性がある。楕円形金具は長径2.3cm、短径0.9cm、長方形金具は長辺2.1cm、短辺1.0cm、文様は縦0.7cm、幅0.9cmを測る。

② 不明金属器2（写真10）

写真10は、吊装具とみられる。長辺5.0cm、短辺1.0cmの細長い銅板の左右両端に環状の吊金具が付いている。銅板と吊金具の間には、不明金属器1にみられた有機質のものが残っており、これ

写真9　不明金属器1　（右）反対面の長方形金具と文様

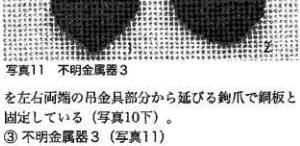


写真11　不明金属器3

を左右両端の吊金具部分から延びる鉤爪で銅板と固定している（写真10下）。

③ 不明金属器3（写真11）

2点とも鉄製のもので不整形である。1は3.0cm×3.2cmほどで厚さが1.9cm、2は2.8cm×3.2cmほどで厚さが2.0cmを測る。

Ⅳ. おわりに

多久川水系の後期古墳（群）は、馬具の出土率が高く、優品もみられる。また、大刀や鉄鏃等の武器が副葬される古墳も多いことから、被葬者は軍事、あるいは馬の管理等にかかわった集団の可能性が指摘されている（註）。坂元古墳群1号墳の被葬者もその一角を担っていたと想定される。

今回の資料紹介は、資料の表面観察に基づき、その概要を報告するにとどまった。今後は、多久川流域で出土する外来系遺物や、同流域でみられる肥後地域の影響を受けた複室構造石室の受容等を含めて検討することで、当該流域の古墳の被葬者の実態や地域の様相が明らかになるのではないかと考える。この資料紹介がその一助となれば幸いである。

【参考文献】

川村 博編1980『板山古墳群―福岡県糸島郡前原町大字雷字坂元所在遺跡調査報告―』前原町文化財報告書第1集　前原町教育委員会

【註】

岡崎雅俊「II．5．菅力古墳群・梶原支群…」江野遺和編2002『多久川流域の遺跡群…福岡県前原市多久川流域における堀環文化財調査報告―』前原市文化財報告書第79集　前原市教育委員会

高上山古墳に関する新資料

―『江藤正澄備忘録』から探る高上山古墳―

岡部　裕俊（伊都国歴史博物館）
中牟田寛也（伊都国歴史博物館）

1．はじめに

関西大学総合博物館が所蔵する鹿角刀装具の出土地について、従来から高上大塚古墳とする見解が示されている（註1）。岡部も歴史博物館紀要に掲載した「曽根古墳群の記憶」（註2）で同様に比定した。

しかし、その後、池田祐司氏から高上山古墳出土品の発見に関する江藤正澄の備忘録の存在をご教示いただいたことから、改めて当該古墳についての検討を行った。

資料が作成された記録の性格上、その内容や精度に限界はあるものの、当該資料からは、古墳の立地や構造、共伴した副葬品などの新たな知見が多く得られ、古墳の年代観や評価など今後の調査研究にも有意義と考えられるので、その成果を報告する。なお、執筆は岡部、中牟田が共同で行い、各項の末尾にその責を記した。

なお、今報告の契機となるご教示をたまわりました池田氏に厚く御礼申し上げます。（岡部）

【註】

1．福岡県教育委員会（原田大六他編）1973『福岡県文化財地図』では、別掲地名表の高上大塚古墳の備考欄に「鹿角刀装具」の記載がある。また、福岡県教育委員会1982『豊前国風土記』中で高上大塚古墳について論じた柳田康雄は、鹿角刀装具出土の記録とともに「本山考古室資料」の図面を掲載している。

2．岡部裕俊2013「曽根古墳群の記憶」『伊都国歴史博物館紀要8』

2．江藤正澄と「江藤正澄備忘録」所収記事

江藤正澄（1836～1911）の事蹟は、自然史料（註1）、筑紫豊氏の基礎的研究（註2）が知られる。天保7年（1836)筑前国秋月藩士上野忠右衛門二男に生まれ、同藩の医者江藤良禎の養子となり、国学や故実を学ぶ。明治3年（1870）神祇官出仕後、県内外の神社神職を歴任、明治10年に致仕し福岡に戻った後、古書・古美術商を営みつつ様々な社会事業に携わり、著述を多く残した。典籍・古器物蒐集に熱心で、国学者・神職の素養に加え、明治19（1886）年に東京人類学会入会し先進的知識も貪欲に摂取した。多くの観点で研究がある（註3）一方、膨大な関係資料に比して個別研究が十分でない部分もある。

「江藤正澄備忘録」（九州大学附属図書館所蔵江藤正澄関係資料）は、「江藤正澄備忘録　一」「江藤正澄備忘録　二完」（いずれも外題）と題する自筆本二冊から成る。同資料「二」収載の本文標題「〇糸嶋郡雷山村字（挿入二字「高上」）古墳発掘所出（明治39年／６月２日青柳林太郎持参）」四丁分の記事（「目次」の項目名は「糸島郡雷山村高上古墳記　四枚」）は、明治39年6月2日に青柳林太郎が持参した当該古墳出土品の記録で、注記・注釈を伴う図、所見を記す本文より成る。

古墳景観図（第１図Ａ）1点、石室見取図（第２図Ｂ）1点は立地や石室構造と計測値が記録され、出土品図10点分は江藤が熟覧観察の上模写したと見られる。一部出土品は、記事冒頭の注釈に「大坂市東区豊後町ハ新聞屋敷（挿入六字「大坂毎日新聞」）本山意一氏ヘ仕出スナリ」とあり、現調西大学博物館「本山コレクション」を構成する資料の来歴を裏付ける。

「明治39年６月４日」（本文末尾）と、江藤が出土品に接した直後の著述であることから、自身の観察に基づく情報以外は青柳からの聞き取りによると思われるため、景観や石室見取図、計測値等の精度の限界は留意すべきであろう。

本資料は、明治44年に没する江藤晩年の著述で、長年の古墳物に関する深い知見と洞察が発揮された比類なき記録といえる。（中牟田）

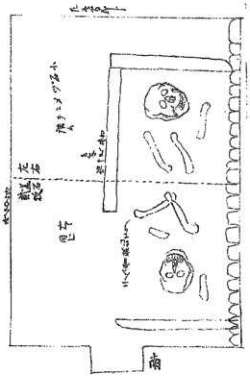
【註】

1．「江藤正澄備忘録正本写」（九州大学附属図書館所蔵江藤正澄関係資料）、「遺稿帖」（福岡市総合図書館所蔵複製フィルム本（原本不明））。

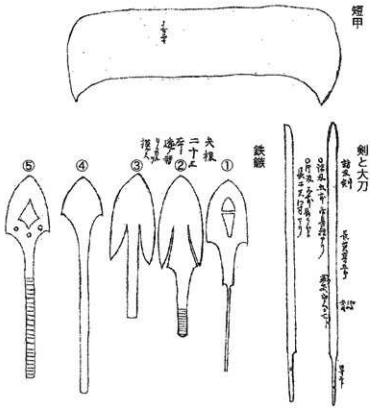
2．筑紫豊1954「江藤正澄自筆稿本『遺稿帖』について」『福岡商学』第3号、同前2）1969「江藤正澄の西新～依知の出土石製品の文化人」、秋月郷土録

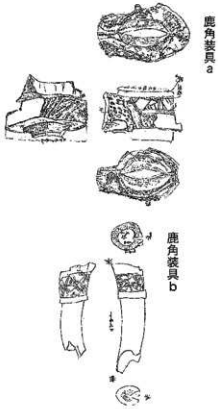
3．日比野利信2004「史学所蔵資料と資料一件帖」（『「古器大事録」の展開　文献目録と史料編別編』）、雪笠正人2006「江藤正澄と國四郎物語」（『福岡市博物館研究紀要』16号）、三浦泰之・山本祐2012「筑紫国の『考古説』江藤正澄と長崎武四郎―江藤正澄『遺稿帖』を中心に」（『北海道開拓記念館紀要』40号）など。

A. 高上山古墳と周辺の地形



B. 石室聞き取り図





C. 出土遺物模写図　(遺物図は再配置　縮尺任意)

第１図　「江藤正澄備忘録」に記された図

3．調査・検討の成果

(1)古墳の位置と現状

古墳の位置について、これまでは漠然と高上地区の山稜上に所在するという認識に留まっていたため、この地区の前方後円墳として知られた高上大塚古墳がその候補とされてきた。しかし、備忘録に示された古墳図をみると山の麓の畑地から急峻な斜面を登った頂に石槨状の埋葬施設が描かれており、背後には山並みも描かれている。また、麓から百間ほどの距離であったことが示されている。高上大塚古墳は、曽根丘陵上の高所にあるというものの古墳裾にあった農地との標高差はせいぜい10m、距離的にも50mほどしか離れておらず、また図に示されるように背後に山並みは続かないので、遺物を持ち込んだ青柳林太郎からの伝聞であることを差し引いても立地イメージが大きく異なり、気にかかるところとなった。

『福岡県地理全誌』141の高上村の項には「高上山」と称される一峰が集落南端の南五町に所在するとされる。この山稜一帯には後期古墳が点在することが知られるが、この他にも本市で未確認の「高上山古墳」が存在する可能性が出てきた。

一帯を足早に踏査したものの、残念ながらいまだその所在を特定するにはいたっていない。踏査は引き続き行う予定である。(中牟田・岡部)

(2)埋葬施設

埋葬施設について、発掘者の青柳によれば小石積みの石室であったとする。当該地方の石室の変遷を考慮すれば、小石積みと割石の小口積みであったと考えられ、竪穴式石槨か初期横穴式石室である可能性が高い。江藤の石室見取り図によれば、石室は長さ2.7m、幅1.8m、高さ2.1mほどの平面プランが幅広の長方形で、丈の高い空間を有していたことがわかる。石室内への土砂の流入は少なかったとみられ、また、遺物の出土状態から未盗掘であった可能性が高い。

写真1　高上地区南部の山並み

南壁中央に内字状に外に向かって張り出しが描かれていることから、閉塞状態を保った両袖式の横穴式石室で、袖部は板石を立てたのみ、閉塞石も一枚の板石で塞がれていたものと考えられる。天井石は2枚とされることから天井面積も広く、したがって壁面の持ち送りも緩やかだったと考えられる。イメージ的には本市内の長嶽山2号墳（写真2）の石室が想起される。(岡部)

(3)埋葬棺

東側壁に沿って板石に仕切られた区画があり、そこに幅45・5cmの補記がある。これを仮に箱式石棺とすると、糸島地方で使用される古墳時代前～中期の箱式石棺の内法巾が35～50cmほどであるため、その平均値に近い値を示す。しかし、この板石の区画についての長さの数値が示されてい

第2図　高上山周辺の地形と既知古墳の分布

ない。また、側壁寄りの板石と東南角近くの側石も描かれていないところが気にかかる。

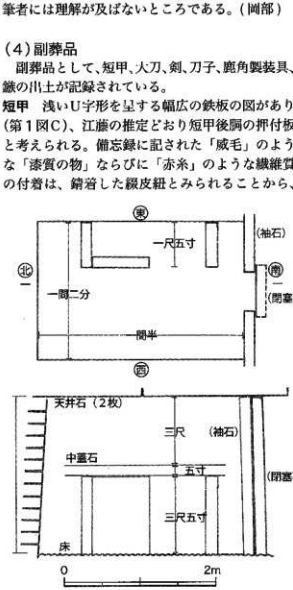
さらに理解に苦しむのはその立面構造である。床から中蓋石までの高さが 106cm ほどあったとされるが、中蓋石が石棺の蓋石を示すとすれば第3図のように丈の高い石棺に復元される。このような石組みの埋葬棺として類例候補を上げると、石屋形や横口式家形石棺なども想定されるが、現在のところ当該地方においてこの種の埋葬棺の発見例は報告されていない。

また、備忘録では、石室の上にも別の埋葬施設があり、2体分の遺骸が検出されたという記録も筆者には理解が及ばないところである。(岡部)

(4)副葬品

副葬品として、短甲、大刀、剣、刀子、鹿角製装具、鏃の出土が記録されている。

短甲　浅いU字形を呈する幅広の鉄板の図があり(第1図C)、江藤の推定どおり短甲後胴の押付板と考えられる。備忘録に記された「威毛」のような「漆賀の物」ならびに「赤糸」のような繊維質の付着は、錆着した綴皮紐とみられることから、皮綴短甲であった可能性が高く、他の数枚の板金が外れて原形を留めていなかった状態であったこともうなずける。



第3図　高上古墳の石室の模式図

京大報告(註1)には、短甲ではなく漆塗冠帽の出土が記されているが、「備忘録」にある繊維状の付着物の記述から冠帽と誤認したのではないかと考えられる。

剣　出土した3本の剣うち、図示されたものは長さ 63cm、刃部 50cm 弱、柄長 13 cm、幅4cmほどとされる。模写図では関が鈍角で柄の中ほどには目釘孔1孔が認められる。

大刀　5本出土したうち、図示されたものは全長 85 ぞほどで、こちらも茎の中ほどに目釘孔が1孔認められる。

刀子　マキリ二個と記されるのは刀子と考えられ、小型の鹿角装具が小刀用であることからこれに伴っていたのかもしれない。

鉄鏃　23 本の出土が報告されており、このうち江藤が「透ノ誉リタル」とした5本の平根式鉄鏃の模写図が掲載されている。(註2・3)

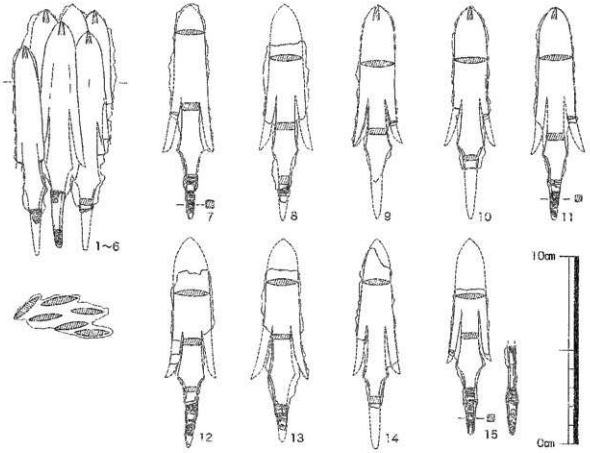
図示されたうち三本は三角鏃、2本は腸抉柳葉鏃とみられる。①〜③は、ナデ関で茎部がいずれも長い。②には縦に並ぶ三角形と逆台形、③には菱形の下に3個の小円形の透孔が設けられ、③は角関を有する。

④、⑤は身幅が広く描かれており。④は山形関を有し、深い切れ込みをいれるが、逆刺の外縁は直線的であまり開かない。

鹿角製装具　2点が図示されており、実資料を関西大学博物館が所蔵することが知られ、井上一樹による詳細な考察がなされており(註4)、詳細はそちらに譲りたい。(岡部)

【註】

1. 浜田耕作　梅原末治1923『近江国高島郡水尾村の古墳』京都帝国大学文学部紀要　日本発見金製耳環、刀剣鏡鐔及び鹿角製刀剣装具集成』10頁
2. 水野敬典 2003「古墳時代中期における鉄鏃の分類と編年」『国立歴史民俗博物館研究報告』第十四の分類、各部呼称に従う。
3. 末永雅雄 1935『畿内墓制考』『末山考古学論叢』
4. 井上一樹 2010「関西大学博物館所蔵鹿角刀装具の成立」『立命館大学考古学論集V』



第4図　二丈浜窯箱式石棺墓出土鉄鏃実測図（1 /2）

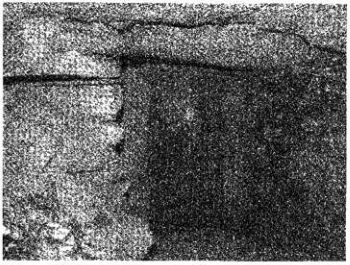


写真2　長畝山2号墳横穴式石室（奥壁から前壁をのぞむ）
羨道の袖および閉塞石はともに薄い板石を立てて配する。高上山上古墳石室前壁を彷彿とさせる。

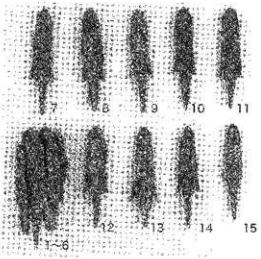


写真3　二丈浜窯箱式石棺出土鉄鏃
第3図鉄鏃の現況写真。蓋石上に棺外副葬されていたとされ、束ねた状態を保つものもある。身部は長大化し逆刺は深い。

4．おわりに

高上山古墳について、備忘録の記述内容によって従来比定していた高上大塚古墳とは異なる未確認の古墳である可能性が出てきた。

主体部は古式の横穴式石室であることが想定され、重藤輝行分類の初期横穴式石室Ａ類（註１）に該当すると考えられる。人骨が２体検出されていることから、追葬も行われていた可能性が高い。

しかし、埋葬棺は石室主軸に沿って一基が描かれているだけで、また記述内容からだけでは構造が把握しづらく、この詳細を明らかにするには、古墳の所在を確認することが重要となってきた。

出土遺物の中では鉄鏃に注目したい。模写図で示された鉄鏃は三角鏃と腸抉柳葉鏃の二種で、このうち腸抉柳葉式鏃にみられる山形関については その盛行期が五世紀前半とされる（註２）ことは、古墳の築造時期を絞り込む上で有効と考える。

市内で山形関を有する鉄鏃がまとまって出土した例としては二丈浜遺箱式石棺（古墳）出土の鉄鏃がある（第４図・写真３）。詳しい調査は行われていないが、板石を木口積みした石棺系石室の天井石の上に棺外祔葬されていたとされる（註３）。同種の石棺は当該地方では初期横穴式石室の影響下で５世紀前半に盛行すると考えられている（註４）ことから、この種の鉄鏃の編年的位置づけとも齟齬はない。

出土した短甲について、玄界灘沿岸における甲冑出土例として情報を追加できたことも成果のひとつといえる（註５）。皮綴短甲の可能性が高く、この種の変遷のなかでは５世紀中葉が皮綴から鋲留への移行の画期と捉えられていることも（註６）、当該古墳の築造時期を推定する上で有効である。

以上、高上山古墳について横穴式石室の構造や出土遺物の検討から、築造時期は概ね５世紀前半期内に収まると考えられる。

高上山古墳の評価にあたり、近隣地域の甲冑出土古墳に目を移すと、老司古墳３号石室(福岡市)、永浦４号墳では短甲とともに大刀、鉄鏃など豊富な武器が出土し、腸抉柳葉鏃が複数本出土していることも共通している。これらはヤマト王権からの下賜品と位置づけられ、相互の密接な政治・軍事的連携の象徴と捉えられている。高上山古墳でも、追葬による副葬品の追加を差し引いても、鉄刀五本、鉄剣三本、短甲、鉄鏃などの豊富な武器や武具が出土したことは、被葬者の軍事的な貢献がヤマト王権との関係深化の背景にあったと考えられる。

当該古墳がどのような形態、規模を有するのかも興味惹かれるところである。高上山古墳の石室は、重藤の初期横穴式石室Ａ類に該当することから、石室規模においては当該地域における上位層の古墳に位置付けられるが、同時期に築造された丸隈山古墳、釜塚古墳などの海岸線に展開する大首長墳と比較するとその規模は小さく、雷山川上流の山間に築かれた立地環境と合わせて考慮すれば、河川水系流域を統括した首長レベルと推定される。

この時期、当該古墳の近隣では井原南田古墳、西堂四反田１号墳など、鹿角装具を備えた刀剣類が相次いで出土している（註７）。これら被葬者がヤマト王権下において、また、当該地方でいかに位置付けられた存在であるか、またその性格を検討するうえでも興味深く、今後の継続的な検証も必要と考える。(岡部)

【注】

1．重藤輝行・西隼一郎1995「烏帽子型古墳の構造」『九州考古学』第70号

2．橋本達也2004「6.鉄鏃」『永浦遺跡第1次・2次調査』古賀市教育委員会

3．原田大六1969『伊都国王墓調』図録　フクニチ新聞社

4．重藤輝行・西隼一郎1995「埋葬施設にみる古墳時代北部九州の地域性と階層性」『日本考古学』2　巻2号

5．竹内潤一郎1982『日本歴史地図　原始・古代編上』協同出版では、短甲出土古墳として図上にプロットされている。

6．橋本達也2004「永浦４号墳の甲冑セットとその意義」『永浦遺跡第1次・2次調査』古賀市教育委員会

7．岡部裕俊2013「曽根古墳群の記憶」『伊都国歴史博物館紀要８』

「怡土城」築城における人間模様
—藤原仲麻呂と吉備真備・佐伯今毛人—

瓜生　秀文（糸島市教育委員会文化課）

1．はじめに

「怡土城」は（註1・図1）、8世紀半ば、福岡県糸島市高来寺・大門・高祖に所在する高祖山（標高416m）の西斜面に築かれた古代山城である。

当時、日本と新羅間の国際関係が悪化して新羅征討の気運高まる中で、大宰府防衛の西の拠点として築城されたものと考えられている。頂は山頂の稜線、北は尾根、南は谷、西は山裾を境としており、全周6.5km、城内面積は約290haに及ぶ。

現在でも北辺に5ケ所、南辺に2ケ所の望楼跡・礎石群のほか、西に2ケ所の礎石が残っている。特に全長約2kmに及ぶ土塁は残存状況に恵まれ、往時の城域の構造がよくわかる。

怡土城の築城期間・担当者・経過などについては『続日本紀』に記録されており、その築城担当者として、「吉備真備」・「佐伯今毛人」の2人が確認できる（註2）。小論では怡土城の築城を指揮した2人と当時政権の中枢にいた「藤原仲麻呂」（註3）との関係を通じて、怡土城築城の影に見え隠れする人間模様（註4）について若干ではあるが考察することにする。

2．藤原仲麻呂と吉備真備（図2）

最初に怡土城の築城を指揮した吉備真備（註5）は持統天皇9年（695）、下級官吏下道朝臣圀勝の子として生まれ、宝亀6年（775）10月2日に薨じた。享年83歳（薨伝では81歳）。極官は右大臣であった。

吉備真備は僧玄昉とともに橘諸兄（註6）政権のブレーンであった。ところが、橘諸兄政権の弱体化とともに藤原仲麻呂が頭角をあらわし、まず、僧玄昉を造観世音寺長官として筑紫（九州）に左遷する。結果として、天平18年（746）、僧玄昉は観世音寺の落成式の際、藤原広嗣の亡霊（支持者）に暗殺される。（註7）

次に藤原仲麻呂は吉備真備も筑紫に遠ざけ、筑前守、そして俄かに肥前守へと左遷する（註8）。当時、筑紫（九州）のなかでも特に肥前地方において反政府的動向が見られたようだ（註9）、その一例として、天平12年（740）、乱を起こし「大宰少弐」から藤反人となった「藤原広嗣」を値嘉嶋の人々（肥前国の海人）は済州島の近くまで逃亡するのを加勢している。さらに、刑死後には「鎮勅知識寺」をも建立し、その死を弔っている（註10）。こうしたことから、僧玄昉の暗殺は筑紫における藤原広嗣の支持者によるものと考えられている。藤原仲麻呂はこれらのことをふまえ、吉備真備も僧玄昉と同じ運命にあわせようと考えたのであろう。

しかし、吉備真備はその危機をうまくかわす。さらに、藤原仲麻呂は吉備真備を遠ざけるため、天平勝宝3年（751）、遣唐副使として唐へ派遣する（註11）。当時の遣唐使は南島路もしくは南路による渡海であったため難破・遭難率が高かった。吉備真備も帰路で漂流はするものの、帰国を果たす。

恩感がはずれた藤原仲麻呂は天平勝宝6年（754）、吉備真備を「大宰大弐」に昇格させ、さらに怡土城築城の専当官に任命する（註12）。これは吉備真備の軍事方面の才能を活用しつつ、吉備真備を大宰府に釘付けにする巧みな人事（政略）であった。大宰府の10年間、吉備真備は藤原仲麻呂の巧みな政略に沿うことになる。

3．藤原仲麻呂と佐伯今毛人（図3）

吉備真備と中途交代し怡土城の築城を指揮した佐伯今毛人（註13）は養老3年（719）に佐伯人足の子として生まれ、延暦9年（790）10月、薨去した。享年72歳であった。造東大寺長官・造西大寺長官などを歴任し、「京大寺居士」とも称せられた。また大宰府の長官に何度も任命され、極官は民部卿であった。

光明皇后が政治の実権を掌握すると、藤原仲麻呂の権力は急激に増大する。藤原仲麻呂の昇進と強大な権勢は、中央貴族の間に追従する一派と反

感を抱く一派とを生じせしめた。天平勝宝四年ごろからこのような政治的対立はさらに激化することになる。しかし、佐伯今毛人に関しては、その実直な人柄からいっても、この険悪な気流には巻き込まれずひたすら東大寺の造営に励んでいた。藤原仲麻呂と佐伯今毛人との関係は東大寺造営を介して天平勝宝８歳（756）ごろまではむしろ円滑であったと考えられている。

その藤原仲麻呂と佐伯今毛人との関係を一転させる大事件が起こる。それが天平宝字７年（763）３月の「藤原良嗣の変」（註14）であった。

天平宝字元年（757）ごろからの藤原仲麻呂の政策は新奇をてらい、私欲に出たものが多く、良識者の眉をひそめさせるものばかりであった。『続日本紀』によると、藤原宿奈麻呂(後に良嗣と改名)が中心となり、佐伯今毛人・大伴家持・石上宅嗣をさそい、彼らの間で藤原仲麻呂を暗殺する蜜謀が議された。ところが、この蜜謀は外に漏れ、右大舎人の弓削男広が藤原仲麻呂に密告した。それを受けて、藤原仲麻呂はただちに彼ら四人を捕縛し、糾問させた。佐伯今毛人・大伴家持・石上宅嗣は、あくまでも蜜謀を否認したが、藤原宿奈麻呂は「宿奈麻呂ひとり謀首たり、他人はかつて預かり知らず」と明言し、３人をかばった。そこで藤原仲麻呂は藤原宿奈麻呂の姓と位階を奪い、蟄居させる。

藤原宿奈麻呂の毅然とした態度によって、佐伯今毛人・大伴家持・石上宅嗣の３人は、危うく虎口を逃れ、無事釈放されたものの、左遷の憂き目は免れなかった。天平宝字８年（764）正月、大伴家持は「薩摩守」、石上宅嗣は「大宰少弐」、そして佐伯今毛人は「営城紫」に任ぜられ筑紫（九州）に追放される。（註15）

ただし、藤原仲麻呂は３人を野放しにしたのではなく、腹心の佐伯毛人を「大宰人弐」に補し、彼ら３人と大宰員外帥（前右大臣）藤原豊成とを監視させたのである。なかでも、佐伯今毛人に関しては天平宝字８年８月には「肥前守」を兼ねさせる（註16）。これはかつて吉備真備に対して実施した人事と同じであり、藤原仲麻呂は佐伯今毛人が筑紫で暗殺されることを望んでいたのかもしれない。

しかし、この正月の異動で藤原仲麻呂はかつて橘諸兄政権におけるブレーンの一人であり、彼が最も恐れていた吉備真備を「造東大寺長官」に任じて入京させてしまう。このことは藤原仲麻呂派にとって大きな禍因となった。

天平宝字８年９月11日、ついに藤原仲麻呂政権にも運命の日が来る。藤原蔵下麻呂が討賊将軍に、吉備真備が軍師として起用され、彼の作戦によって藤原仲麻呂追討戦が開始される。やがて、藤原仲麻呂は鬼江の砂洲で悲惨な最期を遂げ、藤原仲麻呂政権は崩壊してしまう。

４．築城秘話―吉備真備・佐伯今毛人と西海道出身防人―

「怡土城」の築城を開始した３年後の天平宝字３年（759）３月、吉備真備は大宰府防衛の不安４ケ条を中央政府に奏上する（註17）。その中で第２条と第３条は「防人」に関するものであった。

第２条は天平宝字元年（757）８月27日の勅に基づく「東国防人」の廃止による防衛上の不安を訴え、さらに「東国防人」の復活を望んでいる。第３条は天平宝字元年に廃止された「東国防人」の代わりに新しく差し遣わされた西海道（九州）出身の兵士で編成された「防人」を「怡土城」の築城に従事させたいという内容であった。特に、第３条は当時の防人の規定になかったために大宰府の官人達の反対を押し切ってまでもあえて奏上している（註18）。

そもそも「防人」は大化の改新の詔にその記述を確認できるが、実際に制度化され充実していくのは天智３年（664）の白村江の敗戦後と考えられている（註19）。はじめは諸国から出されたようであるが、天平２年（730）をさかいに東国出身の兵に切替えている。その後、運営が困難となったため、次第に筑紫（九州）の兵に代えられているが、東国出身の兵に固執する傾向にあった。

この理由の一つとして、東国の地は早くから大和政権に掌握され、その軍事的・経済的基盤となっていた。それに対して筑紫（九州）の豪族は「筑紫君磐井」に代表されるように反公権力のエネルギーを強く温存する特徴があって、東国の中央権力へ従属度に比べると大きな差があった。筑紫へ左遷された吉備真備も天平12年（740）に乱を起こした藤原広嗣を支持し、刑死後も彼のため

に「知識寺」を建立する筑紫の豪族の反公権力的な特質を筑前守、特に肥前守のときに体験したのであろう。そのために吉備真備は西海道出身の兵士で編成された「防人」を最前線に配置しないであえて「怡土城」の築城に従事させ、その一方で「東国防人」の復活を熱望したと理解できる。

「怡土城」築城を吉備真備と中途交代した佐伯今毛人も「防人」については東国防人の兵に固執する傾向にあり、天平神護2年（766）4月に太政官に進言し、さきに廃止された東国出身の防人の復活を請い、勅許を得ている。この進言の理由として佐伯今毛人も吉備真備と同じように「肥前守」の際、筑紫（九州）の反公権力的エネルギーを強く温存する特質を体験したためであろう。そして、天平神護2年4月、佐伯今毛人より進言された東国出身の防人の復活を時の中央政府の右大臣として許可したのが、最初に「怡土城」の築城を専当した吉備真備であった。

5．吉備真備と佐伯今毛人（図4）

吉備真備と佐伯今毛人との関係を直接示す史料の存在は現時点において確認されていない。

しかし、吉備真備に比べると、佐伯今毛人に関する史料のほうが比較的良好に揃っているため、ここでは佐伯今毛人に関する史料を基に両者の関係について考察したい。

まず、佐伯今毛人の父親である佐伯人足と吉備真備とに接点が認められる。佐伯人足は右衛士督（従五位下を極官として政界を引退したのであるが、その後任として就任するのが吉備真備であった。吉備真備は天平7年（735）、唐より帰国し、大学助（正六位下）から中宮亮（従五位上）へと昇格し、そして天平10年（738）には右衛士督の任にあった。これから推測すると、佐伯人足は天平9年（737）まで右衛士督であったのか、あるいは天平9年の疫病（天然痘など）によって卒去したのかのいずれかであったであろう。ここで佐伯今毛人を人足の30歳の時の子と仮定し、そして人足が天平9年の疫病（天然痘など）によって卒去したとすると、人足は48歳で卒したことになる。佐伯人足の婿子である佐伯今毛人は20歳を前にして父人足の死に遭ったと考えられる。

佐伯今毛人には佐伯真守という兄がいた。この佐伯真守もなかなかの人物であり、後には大蔵卿（正四位上）まで昇進している。天平宝字7年（763）3月に起こる「藤原良継の変」で佐伯今毛人は筑紫（九州）に左遷されるのであるが、翌天平宝字8年（764）、兄の佐伯真守は正六位上で都にいた。おそらく佐伯真守は、父である佐伯人足と同じコースをとって衛府の武官であったと考えられている。その佐伯真守が天平宝字8年に「造東大寺司」の判官に転じるのである。時の「造東大寺長官」は大宰府から帰京した吉備真備。この異動の背後には、吉備真備の運動があったと考えられる。佐伯真守は吉備真備の秘書官のような仕事も担当していたのであろう。そして、吉備真備は「造東大寺長官」が管理する「正倉院」は類のない宝庫であるのと同時に、重要な兵庫（兵器倉庫）であることも知悉していた。造東大寺司の次官の国中連公麻呂は時勢には超然としていたため、佐伯真守は判官の美努連奥麻呂と気脈を通じ、他日を期していたと考えられる。そしてついに藤原仲麻呂政権にも、運命の日がくる。それは天平宝字8年9月11日のことであった。吉備真備が軍師として起用され、彼の作戦によって藤原仲麻呂派への追討戦が開始される。軍兵の動員と同時に、吉備真備は太上天皇の命令として法師安寛を正倉院に派遣し、佐伯真守と美努連奥麻呂の両判官立会いのもとに、大刀88振・弓103張・甲冑100領・矢筒96具などを取り出しており、その武具を造東大寺司に働いていた工匠や役夫に着装させたと考えられている。その追討軍の中には佐伯今毛人の息子である佐伯三野が含まれ、父親の無念を晴らすべく奮戦した。佐伯三野らの奮戦の結果、藤原仲麻呂派は敗北し、藤原仲麻呂本人は鬼江の砂洲で悲惨な最期をとげた。

藤原仲麻呂の乱後、息子の佐伯三野、兄の佐伯真守は乱を鎮圧した功績により、それぞれ従五位上、従五位下を授けられる（註20）。大宰府にあって佐伯今毛人はわが子と兄の昇進を心からよろこんだことであろう。その佐伯今毛人本人であるが、大宰府に在職中もっぱら力をそそいだのが築城や軍士の配置であった。すでに新羅征討計画は藤原仲麻呂政権崩壊と共に立ち消えになってはいたものの、大宰府としては新羅に対して防備を充分にしておく必要があった。その一環として佐伯今毛人は天平神護2年（766）4月に太政官に進言し、さきに廃止された東国出身の防人の復活

を請う。結果として、勅許を得ることになるが、その背後には時の中央政府の右大臣であり、最初に「怡土城」築城を専当した吉備真備の姿があった。

以上、吉備真備と佐伯今毛人との関係を直接説明する史料は確認できないが、佐伯今毛人の父親の佐伯人足、兄の佐伯真守、そして息子の佐伯三野をも通じて、吉備真備と佐伯今毛人の両者は何らかの接点を持っていたと考える。推測の域を出ないが、特に、藤原仲麻呂の乱前後において、事を成就させるため都と大宰府との情報交換は吉備真備と佐伯今毛人のみならず、佐伯真守・佐伯三野をも巻き込んで慎重かつ綿密に行われていたのではなかろうか。今後さらなる史料の蓄積を待ってこのテーマについては再度考察したいと思う。

6. おわりに

以上、「怡土城」築城を指揮した吉備真備・佐伯今毛人と当時政権を掌握していた藤原仲麻呂との関係について考察したが、史料の制約もあり不明な点が多く、十分な考察ができたとは言い難い。（図5）

しかし、金武青木遺跡から「怡土城」に関する木簡が出土するなど（註21）、若干ではあるが史料が増加している状況である。今後の調査・研究により新たな史料が発見・紹介されると考えられるため、さらなる史料の蓄積を待って、別の機会で考察したいと思う。

なお、本文でも紹介したが、吉備真備・佐伯今毛人の両者は共に左遷され、左遷先として肥前地方があった。古代史において日本と朝鮮半島との関係が悪化した際、肥前地方（海岸部）の海人は朝鮮半島側に内応するという反政府的な動きをとったようである（註22）。この古代史における肥前地方の反政府的行動についても別稿にて考察したいと思う。

【註】

1. 鶴山編『怡土城址の調査』（『日本古代文化研究所報告』 第6・1937年）
   瓜生秀文編『国指定史跡 怡土城跡』（前原市文化財調査報告書・第九四集・2006年）
   なお、文献史料としては『続日本紀』天平勝宝8歳6月22日条及び『続日本紀』神護景雲2年2月28日条等がある。
2. 「怡土城」と「吉備真備」との関連を示す史料は『続日本紀』天平勝宝8歳6月22日条、「怡土城」と「佐伯今毛人」との関連を示す史料は『続日本紀』天平宝字8年正月21日条を参照。
3. 岸俊男『人物叢書 藤原仲麻呂』（吉川弘文館・1987年）
4. 瓜生秀文「怡土城について－怡土城築城における人間模様－」（『高倉洋彰編『東アジア古文化論攷』中国西店・ 2014年）
5. 宮田俊彦『人物叢書 吉備真備』（吉川弘文館・1988年）
6. 中村順昭『人物叢書 橘 諸兄』（吉川弘文館・2019年）
7. 『続日本紀』天平18年6月18日条
8. 『続日本紀』天平勝宝元年正月十日条及び『続日本紀』 宝亀6年10月2日条
9. 狭 洋一「天平宝字5年の肥前国 （『西南学院大学国際文化論集』116・1986年）
   瓜生秀文「怡土城に関する建問題－怡土城築城担当者と「肥前守」について」（『八幡市の研究』・大宰府史跡発掘50周年記念論集・高志書院・2018年）
10. 長 洋一「藤原広嗣の悲哭 哭書」（『歴史評論』417・1987年）
11. 『続日本紀』天平勝宝3年11月7日条 藤原清河（従四位下）を大使、大伴古麻呂（従五位下）を副使、それに吉備真備（従四位上）が副使として任命される。この遣唐使は経験が二人であって異例である上に、大使の藤原清河より副使の吉備真備の位階が上であった。この感謝の背後には、時の権力者「藤原仲麻呂」の政治的意図が見え隠れする。
12. 『続日本紀』天平勝宝8歳6月22日条 『続日本紀』によると、吉備真備は「専当官」となっている。この「専当官」は正式の官職名ではなく、吉備真備はあくまでも大宰府官人の一人として怡土城築城の担当を命じられていると考えられる。
13. 角田文衛『人物叢書 佐伯今毛人』（吉川弘文館・1988年）
14. 『続日本紀』宝亀8年9月18日条
15. 続日本紀』によると、吉備真備は「専当官」、佐伯今毛人は「専知官」となっている。この「専当官」は正式の官職名ではなく、吉備真備はあくまでも大宰府官人の一人として怡土城築城の担当を命じられていたことを示していると考えられる。一方、「専知官」は正式の官職名と考えられ、佐伯今毛人は怡土城築城の為の官司機構の長官であったことを想定される。このことから、怡土城築城当初から完成にいたるまで次第に怡土城築城に関する大宰府の官司機構が整備されていったことも同時に示唆していると考えられる。
16. 『続日本紀』天平宝字8年8月4日条
17. 『続日本紀』天平宝字3年3月24日条
18. 吉備真備が奏上した案件（第3条）を藤原仲麻呂は許可している。この背景には東北地方で蝦夷などを懲戒に従事させたということがあったかもしれないが、一つの考え方として藤原仲麻呂の吉備真備に対する警戒心が次第に薄らいでいったと考えることができる。
19. 『日本書紀』天智天皇3年是歳条
20. 『続日本紀』天平宝字8年9月12日条及び『続日本紀』 天平宝字8年8月10日7日条を参照。
21. 加藤隆也編『金武青木 金武青木A遺跡第一次調査・金武青木B遺跡第一・二次調査－』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第1146集・2012年）
22. 狭 洋一「天平宝字5年の肥前国」（『西南学院大学国際文化論集』116・

1984年)
瓜生秀文「怡土城に関する諸問題—怡土城築城担当者と『肥前守』について—」(『大宰府の研究』・大宰府史跡発掘50 周年記念論集・高志書院・2018年)

【参考文献】

『続日本紀』(新日本古典文学大系・岩波書店・2009年)
狩谷棭斎『古代官衙の世界—その構造と機能評定・再建—』(埋蔵文化財センター・1989年)
長 洋一「藤原広嗣の叛乱 立者」(『国史学論』417・1985年)
長 洋一「天平宝字五年の肥前国」(『西南学院大学国際文化論集』116・1986年)
鷹山 猛「怡土城跡の調査」(『日本古代文化研究所報告』第6・1977年)
瓜生秀文編『国指定史跡 怡土城跡』(糸島市文化財調査報告書・第94集・2006年)
岸 俊男『人物叢書 藤原仲麻呂』(吉川弘文館・1987年)
宮田俊彦『人物叢書 吉備真備』(吉川弘文館・1988年)
中村修也『人物叢書 橘 諸兄』(吉川弘文館・2019年)
角田文衛『人物叢書 佐伯今毛人』(吉川弘文館・1988年)
加藤隆也編「金武青木—金武青木A遺跡第一次調査・金武青木B遺跡第一・二次調査—」(福岡市埋蔵文化財調査報告書第146集・2012年)
瓜生秀文「怡土城について—怡土城築城における人員編成—」(遠賀川歴史館『東アジア古文化論攷』中国書店・2014年)
瓜生秀文「怡土城と吉備真備・佐伯今毛人」(『西日本文化』第471号・西日本協会・2014年)
瓜生秀文「怡土城に関する諸問題—怡土城築城担当者と『肥前守』について—」(『大宰府の研究』・大宰府史跡発掘50周年記念論集・高志書院・2018年)

【図版出典】

図1 怡土城遺跡図(『国指定史跡 怡土城跡』(糸島市文化財調査報告書・第94集・2006年)に修整・部加筆)
図2 吉備真備と藤原仲麻呂(筆者作成)
図3 佐伯今毛人と藤原仲麻呂(筆者作成)
図4 吉備真備と佐伯今毛人(筆者作成)
図5 藤原仲麻呂と吉備真備・佐伯今毛人(筆者作成)

【付記】

この小稿は「怡土城と吉備真備・佐伯今毛人」(『西日本文化』第471号・西日本協会・2014年)に一部修正を加え、訂正を加えたものである。

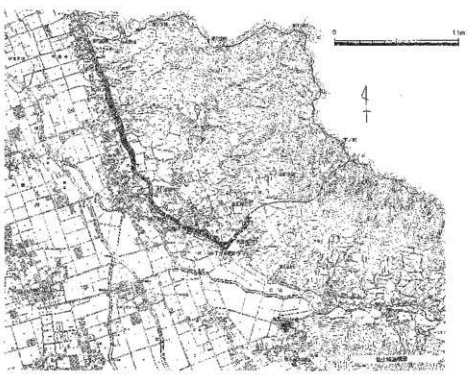


図1 怡土城遺構図

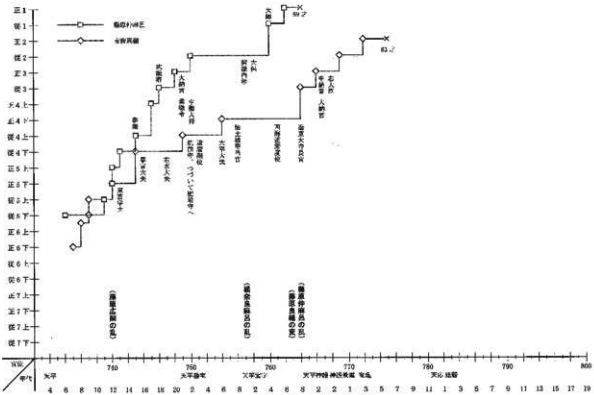


図2　吉備真備と藤原仲麻呂

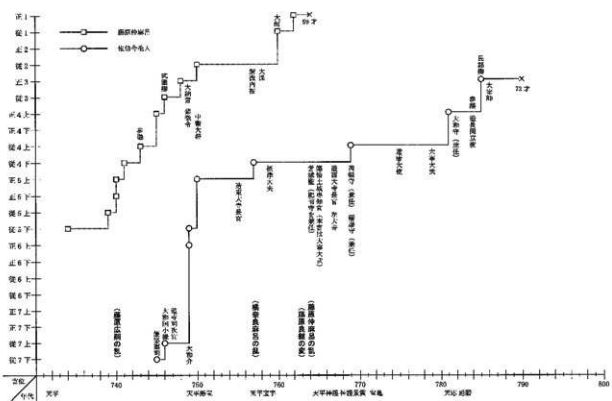


図3　佐伯今毛人と藤原仲麻呂

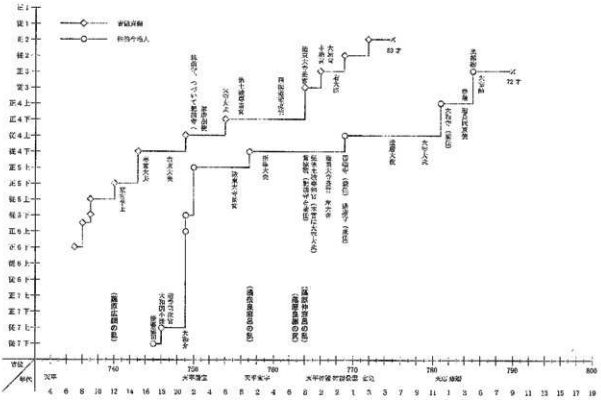


図4　吉備真備と佐伯今毛人

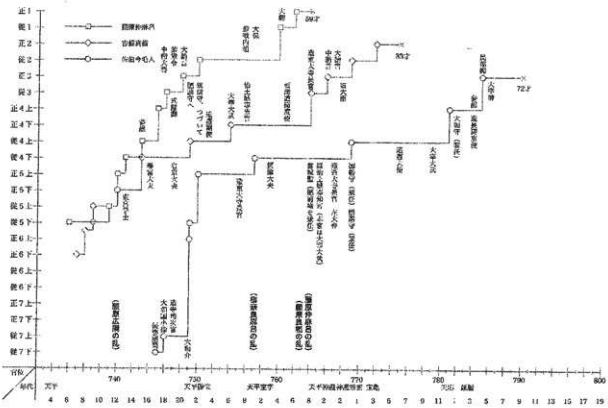


図5　藤原仲麻呂と吉備真備と佐伯今毛人

糸島市立　伊都国歴史博物館紀要
第17号

発行日　令和4年3月31日
発　行　糸島市立伊都国歴史博物館
〒819-1582
福岡県糸島市井原916
印　刷　㈲ケンホクプリント
〒819-1631
福岡県糸島市二丈福井2620－1
TEL（092）326－5940